

筑波大学第三学群国際総合学類
卒業論文

フィジーにおける国民的アイデンティティの形成

2010 年 1 月

氏名：古志歩早
学籍番号：200511107
指導教員：関根久雄

目次

第1章 序論	1
1. 問題意識・問題設定	1
2. 研究方法	4
第2章 歴史的概観—フィジー人とインド人の関係	7
1. 植民地時代から独立まで	7
(1) 先住民保護政策とインド人移民の導入	7
(2) インド人への対立感情の芽栄え	9
2. クー・カルチャー (Coup culture)	11
(1) 幻の国民統合：独立	11
(2) 「フィジー人のためのフィジー」：1987年クーデター、1990年憲法 ...	12
(3) 両民族の歩み寄り：1997年憲法	15
(4) 「フィジー人の至上権」の絶対性：2000年クーデター	16
(5) 国民統合の行方：2006年クーデター～現在	17
第3章 フィジーの国民統合とアイデンティティ	19
1. 民族アイデンティティ	19
(1) 民族アイデンティティの形成	19
(2) 民族アイデンティティの政治動員	21
2. フィジー社会の矛盾	23
3. アイデンティティの実際	26
(1) 都市の矛盾	26
(2) 矛盾のなかに生きる都市の若者	28
(3) アイデンティティの揺らぎ	33
第4章 国民的アイデンティティの形成に向けて	35
1. 人民憲章	35
(1) 概要 [cf. 東 2008]	35
(2) 国民的アイデンティティ形成のための提案[cf. 東 2008]	37
(3) 国民の意見	39
2. NGOの試み	42

第5章 結論.....	4 4
注	4 7
参考文献.....	5 0
英文サマリー	5 5
謝辞	5 7

図目次

図 1 フィジー諸島共和国地図.....	6
----------------------	---

表目次

表 1 民族別フィジー人口の推移.....	1
-----------------------	---

第1章 序論

1. 問題意識・問題設定

フィジー諸島共和国（The Republic of Fiji Islands）（以下、フィジーとする）は、南太平洋に位置する約 330 余の島々からなる島嶼国である（図 1 参照）。国土総面積は 1 万 8274km²で日本の四国とほぼ同じ大きさである。年間を通して気候は温暖で、世界有数の自然に恵まれているため世界各地からの観光客が絶えない。また、最大の島であるビチレブ島（Viti Levu）の東南端に位置する首都スバ（Suva）には、南太平洋地域の総合大学である南太平洋大学（以下、USP とする）がある他、国際機関の本部が多く存在するなど、フィジーは地理・経済・政治の面で南太平洋地域の中心的役割を担っている。

一方で、フィジーは 1970 年の独立以来、1987 年に 2 度、2000 年、2006 年と計 4 度のクーデターが起こるなど、政情不安という大きな問題を抱えている。2007 年の統計によると総人口は 83 万 7271 人で、フィジー人 56.8%、インド人 37.5%、その他（ロトウマ人、中国人、ヨーロッパ人⁽¹⁾ など）5.7%という構成になっている（表 1 参照）。このうち 2 大民族であるフィジー人とインド人は、言語（フィジー語、ヒンディー語）、宗教（キリスト教、ヒンドゥー教、イスラム教）、文化的に相容れない特徴を有しており、社会的にも、政治や経済面においても対立的な関係を築いてきた。

表 1 民族別フィジー人口の推移

	1881	1901	1921	1936	1946	1966	1986	1996	2007
フィジー人	11,478 (91%)	94,397 (78.6%)	84,475 (53.7%)	97,651 (49.2%)	118,070 (45.5%)	202,176 (42.4%)	329,305 (46.0%)	393,575 (50.8%)	475,739 (56.8%)
インド人	588 (0.5%)	17,105 (14.2%)	60,634 (38.6%)	85,002 (42.8%)	120,414 (46.4%)	240,960 (50.5%)	348,704 (48.7%)	338,818 (43.7%)	313,798 (37.5%)
その他	12,150 (8.5%)	8,622 (7.2%)	12,157 (7.7%)	15,726 (8%)	21,154 (8.1%)	33,591 (7.1%)	37,366 (5.3%)	42,689 (5.5%)	47,734 (5.7%)
合計	127,486	120,124	157,266	198,379	259,638	476,727	715,375	775,077	837,271

（[Fiji Islands Bureau of Statistics: 2009] より筆者作成）

フィジーにおける政治的混乱の最大の原因は民族対立である。民族間の調和をとり、国民統合を達成して政治の安定をはかることは独立以来国家建設を行っていくうえで国家の最大の課題であった。しかし、両民族の対立が1987年の第一次クーデターで表面化して以降、さまざまな国民統合政策が行われてきたにもかかわらず、どれも短期間で崩壊する結果に終わった。政治的混乱が起こるたびに国内の経済が大きな打撃を受け、国際社会からも排除されてきたフィジーにおいて国民統合の達成は現在も変わらぬ国家の最大の目標である。

では、フィジーにおいて民族間関係が改善されず、国民統合が達成されない要因は何であろうか。国民統合の達成をテーマに、フィジー社会に特徴的な問題を探る先行研究はこれまで多く行われてきた。クーデターの発生背景や憲法の内容、民族間の文化的差異や経済格差など、着目する点はさまざまであるが、多くの研究は、「フィジー人の至上権 (The paramountcy of Fijian interest)」と「インド人の平等」の同時達成という議論に帰着する。地縁関係にもとづく土地制度と首長を中心とする権力構造を重んじるフィジー人は、先住性 (先住民の特権) に訴えて、自らの「至上権」を主張する。一方のインド人は、自分たちがフィジーの経済を支えていることを強調しつつ、国際的な人権尊重の流れの後ろ盾を受けて「平等」を主張し、フィジー人と同等の権利を求める。国民統合を達成するためには、この「フィジー人の至上権」と「平等」をいかに扱うかがやっかいな問題であった。今後、両者が均衡する社会を導くことは可能なのだろうか。可能であれば、それはどのような状況であろうか。

また、政府は、このような相容れない主張をする各民族の独自性を保護する一方で、多文化主義を掲げてきた。このような矛盾は、フィジー人の伝統的社会制度を保護しながら、一方で近代的政治体制の確立を目指すというように、英国植民地時代からフィジー社会に存在していた。このことは、クーデターの発生前からすでに指摘されていたことである [Durutalo 1986; Norton 1977 など]。4度のクーデター、2度の憲法改正を経験しても、なお政治的混乱に揺れ動くフィジー社会において、社会に長年内在するこの矛盾は、今後解消されるか、それとも存在し続けるのであろうか。存在し続ける場合、それが受け入れられる社会とはどのようなものであろうか。

民族対立に起因する国民統合の問題点に関しては、フィジー人が権力の独占をやめて譲歩の姿勢をみせるべきであると主張するインド人側に立つ論者と、いつまでたってもフィジーに同化しないインド人を批判し、フィジー人の至上性を絶対視するフィ

ジー人側に立つ論者とに見解は二分される。しかし、両者の相容れない主張の具体的な内容を検証すると、その主張はあいまいであり、何をどうすることが至上性及び平等を確保することなのかについての議論はまだされていない [橋本 2005:142, 250]。最近では、民族対立に加えて、民族を越えた階級対立や民族内部の分裂も無視できないほど深刻化してきた。それぞれが自民族の利益だけを主張しても国民統合が達成されないと分かった今、民族や階級に関係なくフィジーに住むすべての人々が共有でき、国民的アイデンティティ形成の基礎となる文化をみいだすことが不可欠である。

南太平洋大学の言語学者ポール・ギャラティ (Paul Geraghty) は、すべての人々が共有する国民的アイデンティティの基盤となりうる文化「フィジアンネス(Fijianness)」という概念を提唱した。これは、すべての国民がフィジー語を第一言語とすることで、それがフィジー文化を守ることにつながり、「フィジー国民」としてのアイデンティティの基盤になるという、文化尊重論を発展させた概念である [cf. Geraghty 1997: 1-23; 橋本 2005:251-252]。ギャラティは、フィジー人とインド人が言語やスポーツ、飲食文化などの点ですでに交流していることを挙げ、両民族は文化の面ですでに融合しており、「フィジアンネス」を共有しつつあると主張する [Geraghty 1997: 1-23]。しかし、橋本はこの概念の可能性をある程度認めながらも、両民族の交流は表面的なものにすぎず、「フィジアンネス」の概念はもっと鍛え直される必要があるという [橋本 2005: 250-255]。実際、ギャラティが「フィジアンネス」について論を展開した後、2度にわたってクーデターが起こっている。では、今後創造されうる「フィジアンネス」とはどのようなものであろうか。現在のフィジー社会において、「フィジアンネス」生成につながる兆しはどこにみられるのだろうか。

筆者は、大学3年次に独立論文で国民統合の歴史を概観したあと、実際にフィジーにおける国民統合の現状を把握するために、2008年2月から2009年1月までの1年間、南太平洋大学に留学してフィジーでの生活を体験した。大学内及び首都スバ中心の生活を送る限りでは、同じ場で共に学び、共に働くフィジー人とインド人の姿をみることが多く、当初は民族間の壁はさほど大きくないものと把握していた。ギャラティがいうように、スポーツや食文化を通して両民族は融合しているとも感じた。しかし、数ヶ月が経つと、両者の差別的な発言を耳にするなど日常的に民族間の壁を感じる経験が増えた。また、村落に滞在した際には、村落ではフィジー人は他民族と交流する機会がいまだに乏しく、インド人を敵対視する傾向が強い。都市と村落、若者と

年長者のあいだに温度差があることがわかった。フィジーでの滞在期間が長くなるほど、民族を分断する壁が根強く存在することを実感した筆者は、国民的アイデンティティの形成に関して悲観的な展望を持つにいたった。しかし、一方で、やはり都市では他民族に寛容な態度を示す人が多く、特に若者にその傾向が強いことも実感した。

そんななか、留学中の2008年12月、バイニマラマ暫定政府首相が設立した「より良いフィジーをつくるための国民会議（National Council For Building A Better Fiji）」

（以下、NCBBFとする）は、「改革、平和、及び進歩のための人民憲章（People's Charter for Change, Peace and Progress: PCCPP）」（以下、人民憲章とする）を発表した。人民憲章は、「統合（Unity）」や「国民的アイデンティティ（national identity）」というキーワードに何度も言及している他、フィジーにおける先住民フィジー人の位置づけについても触れている。つまり、今まであいまいにされてきた国民的アイデンティティ像とフィジー人の至上性の扱いについて、国民に明確な枠組みを文言化して提示しようとした画期的なものである。また、現場レベルにおいても国民統合や国民的アイデンティティをテーマにしたさまざまなイベントや非政府組織（以下、NGOとする）による若者向けのプログラムが行われている。このように発表されて間もない人民憲章や、現場レベルでの活動についての先行研究はほぼ行われていないが、どちらも今後どのような役割を果たすのか、関心を集めている。

本稿では、以上のような問題意識や留学中の経験をふまえて、フィジーにおける国民統合と国民的アイデンティティの形成について論じる。国民統合の鍵となるフィジー人とインド人の関係がどのように変化してきたのかを明らかにし、フィジーにおける国民統合の問題点を明らかにする。また、フィジーにおいてどのようなアイデンティティが形成され、変容しているのかについても検証する。そのうえで、国民的アイデンティティは今後どのように形成されるべきかを明らかにしたい。そして、その基盤となる「フィジアンネス」とはどのようなものかについても明らかにする。

2. 研究方法

本稿では文献、学術論文、雑誌、新聞記事を中心に研究を進める。筆者が2008年2月から2009年1月の留学中、及び2009年7月から8月にフィジーで行ったフィールドワークを通して得た情報も適宜用いる。

第2章では英植民地時代から現在に至るまでの歴史を概観し、フィジー人とインド

人の関係が問題となった経緯を明らかにする。その際、各時代でどのような国民統合政策がとられたのかを分析し、その問題点とフィジー社会における民族間関係の特徴を抽出する。

第3章では歴史をふまえた上で、アイデンティティをキーワードに民族間関係について再び言及する。フィールドワークで得た情報も適宜用いて、フィジーにどのようなアイデンティティが存在するのか、また、その生成過程について明らかにする。その際、都市の若者に着目する。

第4章では国民的アイデンティティ形成に向けた新しい取り組みについて、人民憲章を取り上げて、それが提示する国民的アイデンティティ像を分析する。また、NGOなどが行う現場レベルの取り組みも取り上げて、国民的アイデンティティ形成に向けた動きを分析する。

筆者の行ったフィールドワークは、おもに以下の2回である。1回目は2008年2月末から2009年1月初旬にかけて南太平洋大学に留学した際に行った調査である。約1年間の滞在中、スバを中心として地方の村落マヌザ（(Mamanuca) 諸島のヤヌヤ（Yanuya）、ナンドロンガ（Nadoroga）地区のナロロ（Naroro）、サブサブ（Savusavu）島のナギンギ（Nagigi）など）に短期滞在した際に得た情報を用いる。2回目は2009年7月中旬から8月の1ヶ月半にかけて行った。2回目の調査はおもに若者（15から35歳位まで）に焦点を当て、スバ近郊と3日間滞在したレワ（Rewa）地区のロマニコロ（Loma ni Koro）でインタビューやアンケート（付録参照）を行った。また、スバで開催されたパシフィックユースフェスティバル（Pacific Youth Festival）に参加したフィジー各地出身の若者に対しても調査を行った。

なお、本稿では便宜上、フィジー系フィジー人をフィジー人、インド系フィジー人をインド人と称する。人民憲章では国民すべてに「フィジー人」という共通の呼称を使用すると記述されている。共通の呼称として言及する場合には括弧付きの「フィジー人」と表記する。

第2章 歴史的概観—フィジー人とインド人の関係

フィジーにおける民族問題の発生は、英国植民地時代にまでさかのぼる。ヨーロッパ人の入植、インド人契約移民の流入によって多民族国家フィジーが形成されてからは、複雑な民族間関係が歴史を規定し、フィジーは独立後4度のクーデターと2回の憲法改正を経験した。フィジーの歴史は、民族間及び民族内部の対立と歩み寄りの繰り返しであったといえる [Ratuva 2002:12]。独立から主要政策として掲げられる国民統合はなぜ達成されないのか。本章では、植民地時代から現在までのフィジー人とインド人の民族間関係の推移について歴史を追って概観し、フィジーにおける国民統合達成の問題点とそれを解決する鍵を探っていく。その際、「フィジー人の至上権 (Paramountcy of Fijian Interest)」と「インド人の平等 (Parity)」という2つの概念に着目する。

1. 植民地時代から独立まで

(1) 先住民保護政策とインド人移民の導入

フィジー人の祖先は、今から約3500年前にフィジーに移住してきたラピタ人とされる⁽³⁾。彼らは人口が増えるにつれて地縁関係に基づく小規模な集団を発達させ、フィジー社会を形成していった [Donnelly 1994:9]。フィジーが初めて西洋との接触を持ったのは、オランダ人のタスマン (Abel Tasman) がフィジーに到達した1643年である。それ以降、19世紀初頭までに白檀交易等を目的にフィジーに移住するヨーロッパ人は増大し、フィジーと西洋の接触は深まっていった。ヨーロッパ人の商業活動は次第に活発になり、1860年代には綿の好景気が引き金となってヨーロッパ人移住者が大量に流入した。

定住するヨーロッパ人が増えると、土地や安全保障をめぐる社会的混乱が起こりはじめ、フィジーにおける統一政府の設立が強く望まれるようになった。そのような状況を受けて、フィジー人首長たちは4度にわたって土着の統一政府樹立を試みたが、全て失敗に終わった。そこで、フィジー人盟主ザコンバウ (Cakobau) は英国にフィジーの割譲を申し入れ、フィジーは1874年10月10日、英領植民地となった [Donnelly 1994: 17-30; Lal 1992: 10-11; 丹羽 2009:62-63]。

初代総督アーサー・ゴードン (Sir Arthur Gordon) はフィジー人の伝統的な首長の権力構造をそのまま利用して植民地を営む間接統治法を採用した。そして、その間接統治法の大きな特徴のひとつが先住民保護政策である。ゴードンはフィジー人の「伝統的生活様式 (Fijian way of life)」を保守することに努め、土着の社会構造や慣習を生かして植民地の政治体系を再構築した。しかし、植民地化以前はフィジーに地域全体を統治する政治体系は存在せず、さらに地域ごとに異なる言語や地縁慣習があり画一的な「伝統的生活様式」も存在しなかった。そこでゴードンはフィジー人に関係するすべての問題を取り扱う諮問機関として、首長層を集めた大首長会議 (Great Council of Chiefs: *Vose Levu Vakaturaga*) を設置して植民地の政治制度に取り込み、フィジー人を画一的に統治することを試みた。こうして設置された大首長会議は後に、フィジー人の声を代弁する機関として政治において大きな影響力を持ち、政治におけるフィジー人の優位性を支える存在となっている[Lawson 2004:524-525]。

さらに土地所有も土着の慣習を取り込み制度化された。土地を「ネイティブランド (Native Land)」、「クラウンランド (Crown Land)」、「フリーホールドランド (Freehold Land)」の3種類に分類し⁽⁴⁾、そのうち全土の約83%を占めるネイティブランドの所有権をフィジー人に与えた。ネイティブランドは、地縁関係に基づくフィジー人の伝統組織である「マタンガリ (*Mataqali*)」によって所有され、売買が禁止されたためにフィジー人以外の所有は不可能になった。また、「フィジー人土地所有者名簿 (*Volani Kawa Bula: VKB*)」が作られて、フィジー人は出生と同時に父親の所属するマタンガリに所属することが名簿に記載された。この制度によりフィジー人は土地所有においても優遇され、特権的地位を確立した[高橋 2008:4; 丹羽 2009:63]⁽⁵⁾。先住民保護政策は言い換えれば、「フィジー人の至上権」を確立する政策であったといえる。

先住民保護政策の一環として、フィジー人に村落で自給自足の「伝統的」な生活を送ることを推奨し、村落外での労働を禁止した政府は、同時に経済発展のためにサトウキビ・プランテーションに従事する労働力が必要であると認識していた。そこで植民地政府は、1879年、インド人契約労働者 (*indentured labours*) の導入を開始した。5年間の契約労働制度のもとに移民してきたインド人契約労働者は、1916年に制度が廃止されるまでに約6万人に上り、そのうち約4万人が契約終了後も帰国せず、フィジーに定住することを選択した。現在のフィジーにおいて第2位の人口を構成するインド人は、主に植民地時代に労働移民としてフィジーにやってきた人々の子孫である

[丹羽 2009:64]。

こうして、植民地時代初期にフィジーは、先住民のフィジー人、入植者のヨーロッパ人、労働移民のインド人、という三民族集団から成る多民族国家となった。フィジー独立の父ラトゥ・スクナ（Ratu Sukuna）は、その後の歴史を規定していくこの民族間関係を「三脚の腰掛け（three-legged stool）」にたとえ⁽⁶⁾、フィジーという国家が、土地所有者であるフィジー人、労働力を提供するインド人、資本と行政をつかさどるヨーロッパ人という「三脚」にバランスよく支えられて成り立っていると表現した[Scarr 1983; Trnka 2005:357; 丹羽 2009:64]。しかし、植民地時代初期はバランスがとれていた「三脚の腰掛け」であったが、1920年代頃からインド人の人口が増えるにつれて民族間関係に軋轢が生じはじめ、そのバランスは崩れていく。

(2) インド人への対立感情の芽栄え

植民地政府による間接統治体制のもうひとつの特徴は、分割統治政策（Divide and Rule）である。これはフィジー人の「伝統的生活様式」を保護するためにフィジー人社会をヨーロッパ人やインド人などの他の民族集団から切り離して、フィジー人に伝統的な土着の政治を営ませるという政策であった。すなわち、先住民保護政策を遂行するために採用された政策といえる[Nayacakalou 1975: 84-85; 丹羽 2009:84-85]。

植民地時代はこの分割統治政策によって各民族は分断された生活を送ることになった。そのため、植民地初期フィジー人とインド人は相互に交流する機会が少なく、敵対感情を持つことは無かった[Durutalo 1986]。植民地初期フィジー人が脅威を感じて敵対した相手は、政治的にも経済的にも劣位におかれているインド人ではなく、むしろ土地の所有権を脅かすヨーロッパ人であった[Lal 1992: 36; 丹羽 2009:65]。

しかし、契約労働制度が廃止された後の1920年代以降、小作農へ転向したり、自由移民として新たにやってきたりするインド人が増加すると、フィジー人とインド人の民族間関係に変化が生じはじめた。定住を決めたインド人は権利意識が高く、1921年に賃金向上を求めてストライキを起こしたり、植民地議会での議席を求めて政治運動を行うようになった[Durutalo 1986; 丹羽 2009:65]。

両者が植民地政府に生活向上を求めて連携する動きも短期間ながらみられたが、両者の差異は第二次世界大戦への対応をめぐって顕著となる。フィジー人が英国に忠誠を示して果敢に戦い、ヨーロッパ人との連携を強めていく一方、インド人は英国にも

フィジーにも忠誠心を持ち合わせず、戦争に参加する意思を示さなかった。さらに、インド人は戦時中の 1943 年に生活向上を求めて再びストライキを起こして他民族の反感を買った[Durutalo 1986; 橋本 2005:149, 161-164; 丹羽 2009:65-66]。また、ここで特筆すべきことは、戦争がフィジー人にとって、異なる地域や部族出身の者がひとつの民族として友好的な関係を築くきっかけとなったことである。ひとつの民族として連帯意識をもったフィジー人は戦争に非協力的であったインド人を敵対者とみる感情を共有するようになった[橋本 2005:164]。

さらに、1946 年にインド人人口がフィジー人を上回ったことで（表 1 参照）、フィジー人のインド人に対する意識が大きく変化した。先住民保護政策によって植民地後期になっても自給自足の村落生活にとどまり、経済進出が遅れていたフィジー人に対して、インド人はさまざまな分野で権益を拡大していった。インド人は順調に成長するサトウキビ産業に助けられ、また商業などの新たな職業分野に進出して経済力をつけ、教育面でも頭角を現し、政治面でも平等な議席配分を要求する政治運動を起こすなど権利獲得にむけて活動を活発化させていた。政治ではまだ優位性を確保していたものの、経済や教育分野で優位に立とうとするインド人が人口においてフィジー人を逆転したことで、フィジー人はインド人にフィジーを乗っ取るかもしれないという「インド人の脅威(Indian threat)」を感じはじめた[Ratuva 1999; 丹羽 2009:66; Rakuita 2007:3 など]。自らを土地の所有者「タウケイ (taukei)」であると認識するフィジー人にとって、外来者「ブランギ (vulagi)」であるインド人は、フィジー人に敬意を表してそのルールに従うべきものとされる。そのインド人が自分たちの所有する土地において権益を拡大していたことは、フィジー人には許しがたいことであった[Rakuita 2007:37]⁽⁷⁾。

このように、フィジーはフィジー人とインド人の潜在的な対立を抱えながら 1970 年 10 月 10 日、独立を迎えた。独立後の政府は植民地体制初期に作られた社会構造や政治的枠組みを継続して採用し、土地制度や選挙制度におけるフィジー人の至上権は憲法で合法的権利として認められた。一方インド人は「二級市民」としての位置づけに不満を持ち、国民連合党 (National Federation Party: NFP) を結成して権利の拡大をはかろうとしていた。統治者が去った後のフィジーは各民族、特にフィジー人とインド人の関係を取りもって「三脚の腰掛け」のバランスをとるかということを最大の課題として独立国としての歩みを始めた。

2. クー・カルチャー (Coup culture)

(1) 幻の国民統合：独立

独立後の初代首相に就任したのは、同盟党 (Alliance Party) のラトゥ・カミセセ・マラ (Ratu Kamisese Mara) であった。同盟党はフィジー人を主要な支持基盤としていたが、ヨーロッパ人、中国人、一部インド人も支持基盤に取り込んでおり、「多民族主義」を党是として掲げていた。独立後の国家最大の目標である国民統合を試みるうえで、まず問題となったのは植民地時代から継続してフィジー人とインド人のあいだで論争となっていた土地問題や選挙制度問題などをどのように解決するかということであった[小柏 1992:194-195]。

そこで同盟党はフィジー人の至上権を確保したうえで、インド人の権利も保障し、それによって両者間のバランスを保つという「多民族主義」にのっとった国民統合政策を展開した。土地問題に関しては、土地所有の自由化や借地期間の延長を制度化することを求めるインド人と、土地をインド人に奪われると懸念して借地期間の延長を拒否するフィジー人とのあいだに激しい対立があった。同盟党はこの問題に対し、ネイティブランドの売買禁止を憲法で制定することによってあらかじめフィジー人の至上権を確保したうえで、借地期間延長の新法を制定してインド人の権利も保障することで両者のバランスを保った[小柏 1992:195]。

また、同盟党政権は下院の議員選出に関しても同様の国民統合政策をとった。この問題に関してはインド人が普通選挙制度を求め、フィジー人はインド人が人口の点で上回っていることを懸念して民族別の選挙制度の維持を求める、というように両者が対立していた。そこで同盟党政権は民族別選挙制度を維持してフィジー人の至上権を確保したうえで、インド人の権利を認めてフィジー人と同数の議席を与えることで両者のバランスをとる決断をした⁽⁸⁾。このように同盟党政権は教育問題などのその他の問題にもフィジー人の至上権とインド人の権利のバランスをとる国民統合政策を採用して多民族国家の運営を行った[小柏 1992:195-196]。

以上のような両民族のバランスを巧みに維持するラトゥ・マラの国民統合政策は国際的評価も高く、フィジーはローマ法王によって「世界におけるシンボル」とまで称された[小柏 1992:193,197]。しかし、同盟党は国際社会での高い評価とは裏腹に、必ずしも国内で安定した位置を確保していた訳ではなかった。特に 1970 年代後半以降は両民族の対立が国政を舞台にいっそう顕在化した[丹羽 2009:67]。独立後フィジー人が土

地を提供し、インド人が労働力を提供し、ヨーロッパ人が資本を提供するという「三足の腰掛け」の体制に変化はなかったが、インド人は依然ヨーロッパ人とフィジー人の下に位置する「二級市民」であった。インド人はその位置づけに不満を持ち、政治的な対等性を要求する声を高めていったのである[橋本 2005:167]。

ラトゥ・マラの国民統合政策は一見成功したかのようにみえたが、植民地時代に芽生えた民族間の敵対感情は激しく表面化することはなくとも、両民族のなかで確実に増大していった。小柏は、『同盟党の国民統合政策は、結局のところ、エスニック・グループをその基盤としていた（中略）同盟党政権の国民統合政策においては、インド人はあくまでも「先住民」フィジー人に対する「移民」としての立場に位置づけられ、強固に固定されたエスニックな枠組みのもとにおかれていたということができるであろう[小柏 1992:197]』と指摘している。同盟党はその後 17 年間政権を支配したが、植民地時代から特権的地位を確立してきたフィジー人と、「二級市民」としての立場に満足できず権利要求を強めるインド人のバランスをとることは次第に難しくなっていた。独立以来、『全世界から支持を得られるように「国内の民族が調和し、統合している」国民国家フィジーを演出してきた [橋本 2005:196]』フィジーであったが、それぞれの民族は自民族の利益を主張するのみで国民全体の利益を高めようという「国民」としての意識は育まれていなかった。ラトゥ・マラの国民統合は幻にすぎなかったといえる。

(2) 「フィジー人のためのフィジー」：1987 年クーデター、1990 年憲法

ラトゥ・マラの国民統合が幻であったことを証明したのは、フィジー人とインド人の対立が表面化した 1987 年 5 月のクーデターである。この出来事に端を発して民族関係は陰悪化の一途をたどり、フィジーは先のみえない政治的混乱に陥ることになった。

1987 年 4 月の総選挙では同盟党が敗北し、都市の労働者を支持層とする多民族的な労働党（Fiji Labour Party: FLP）とインド人を主要な支持基盤とする国民連邦党（National Federation Party: NFP）が連立政権の座に就いた。当時、同盟党の労働者対策への無策や東部偏重主義が批判的となり、都市の労働者層を中心として組織された通民族的な性格をもつ労働党にフィジー人の票が流れていた[橋本 2005:170]。多民族から支持を得る連立政権が成立したことで、フィジーは多民族が参加する民主的な国民統合を達成したかに思われた。しかし、フィジー人で労働党党首のティモジ・バヴ

アンドラ (Timoci Bavadra) を新しい首相に据えて始動した新政権はインド人がフィジー人と同数の閣僚ポストを獲得したことや与党議員の大半がインド人であったために⁹⁾、フィジー人に脅威を与えた。フィジー人はインド人が政治の主導権を握って自分たちの土地所有権を奪うのではないかと脅威を感じたのであった[小柏 1992: 198-201; 丹羽 2009: 68-69]。

この脅威はフィジー各地で共有され、「タウケイ運動 (Taukei Movement)」と呼ばれる急進的な民族主義運動を引き起こした。当初は連立政権に対する抗議集会を開くのみであった穏健的な運動は、しだいにその激しさを増して各地で暴動が多発した。彼らがプラカードに掲げたスローガン——「フィジー人のためのフィジー (Fiji for the Fijians)」 「私たちの神、私たちの土地 (Our God, Our Land)」 「土地は不可侵だ、手を触れるな (Land is sacred. Hands off)」 「マオリのようにはなりたくない (We don't want to be like the Maoris)」 からも、フィジー人が感じていた「不安 (fear)」や他民族排他的な要求が見てとれる。つまり、自分たちの土地がよそからきた者に支配されてオーストラリアのアボリジニやニュージーランドのマオリと同じ運命をたどるという「不安」がタウケイ運動の原動力となった[Premdas 1991:542]。

1987年5月14日、フィジー人の陸軍中佐シティベニ・ランブカ (Sitiveni Rabuka) は国内の政治混乱を収束させるためということを名目にクーデターを決行した。ランブカはクーデターの主目的を、「インド人によって支配されている連立政権を打破することによってフィジー人の土地所有権などの既得権益を守り、議席配分をフィジー人が有利になるように変更してフィジー人の権利が2度と脅かされることのないように憲法を改正すること[Fiji Sun 1987/5/15]」と説明した。また、ランブカは「我々は神に選ばれた者である。フィジー人のためのフィジーは神が意図したもので、フィジーはフィジー人によって統治されるものである」などと主張してクーデターを宗教的に正当化することも試みた[Premdas 1991:542]。フィジー人の先住性 (indigenosity) に訴えて「フィジー人の至上権」を確立する根拠を見出したランブカは、英連邦諸国からの批判は受けたが、大酋長会議やメソジスト教会、南太平洋諸国からは支持された[橋本 2005:174-175; Lal 1992: 286; Lawson 1991: 262]

クーデターによりフィジーの国内情勢は混乱をきわめた。民族主義的なタウケイ運動やクーデターに対して、民主主義を支持する人々によって「五月初旬復帰運動 (Back to Early May Movement)」が組織され、クーデターを過剰反応であったと批判する動き

がみられた。国内の世論はさまざまに割れたが、与野党合同の暫定政権を樹立することを目指す「デウンバ協定 (Deuba Accord)」によって、フィジーは安定を取り戻すものだと思われていた。しかし、ランブカが 1987 年 9 月 25 日、2 度目のクーデターを決行したことで国内の混乱はさらに深刻化する。ランブカは同盟党と労働党・国民連邦党からなる暫定政権が同盟党の「多民族主義」政策の再現になると判断し、フィジー人の絶対優位を確立するために再びクーデターを起こしたのであった。その結果、ランブカは英連邦からの離脱、共和国の樹立を宣言し、独立時に制定された 1970 年憲法を廃止した[橋本 2005:174-176; 小柏 1992: 202-206; 丹羽 2009: 68-69]。

ラトゥ・マラ元首相を再び首相に迎えて国家再建に取り組み始めたフィジーは、1990 年 7 月 25 日、1990 年憲法を制定した。その内容は、1) 大統領は大首長会議によって任命されること、2) 首相はフィジー人のみ就任可能であること、3) 下院議席 70 をすべて民族別選挙で選出し、そのうち過半数の 37 をフィジー人に配分することなど、「フィジー人の至上権」を確立する規定を含んでいた[小柏 1992: 207-208]。しかし、そのフィジー人偏重主義的な性格からこの憲法は「人種差別憲法 (racist constitution)」であると国内外から批判を受け、海外からの直接投資の減少とインド人特に専門職の海外流出を促した。その影響でフィジー経済は不況に陥り、国際社会からも排除されたために社会的・政治的にも大きな打撃をうけることになった[東 1999a]。

小柏が指摘しているように、1990 年憲法は独立以来追求されてきた「多民族主義」からの完全なる決別を示し、国民統合におけるフィジー人中心を明確に打ち出したものであった。また、下院をすべて民族別選挙による議席をしたことは、労働者層を中心に市民レベルでみられた始めた通民族的な連携を否定するものでもあった。1987 年のクーデターと 1990 年憲法はフィジーに芽生えかけていた通民族的な国民統合の流れを覆した。連立政権によって進められた旧首長制度打破の階級闘争的な動きを、旧来のフィジー人とインド人という民族対立の図式に戻し、解体の危機にさらされたエスニックな枠組みを復活させたのである[橋本 2005:176; 小柏 1992: 208-209]。以上のようなフィジー人による急進的な民族主義運動は、フィジー人の既得権益が少しでも脅かされると、その脅威に対して暴力的な対抗運動が起こることを示唆するものであった。

(3) 両民族の歩み寄り：1997 年憲法

1997 年 7 月 25 日、1990 年憲法に規定されていた通り憲法の見直しが行われ、1997 年憲法が成立した。新憲法では下院議席 71 のうち 46 を民族別議席とし、フィジー人 23、インド人 19、その他 3、ロトゥマ人 1 という配分にした。このなかではフィジー人が過半数を占めるが、残りの 25 議席は民族に関係なく選出されるオープン議席とされたため、全議席中に占める「指定席」の割合は約 32% となった。大統領は大首長会議によって任命される。フィジー人に限られていた首相のエスニシティ要件は削除されてインド人首相の誕生が可能になった。また、多民族からなる内閣を組閣するために複数政党内閣(multi-party Cabinet)制度が採用され、下院で 10% 以上の議席を占める政党から議席数に応じて閣僚が任命されることが規定された。その他にも「権利章典 (Bill of Rights)」が憲法のなかに定められて、フィジーにおけるすべての人々の基本的人権が保障されるなど、各民族・個人の平等主義が強調された民主的な憲法であった[東 1999a]。

また、国名が「フィジー共和国 (The Republic of Fiji)」から「フィジー諸島共和国 (The Republic of the Fiji Islands)」に変更され (第 1 条)、フィジー国民をすべて「フィジー諸島国民 (The people of the Fiji Islands)」の共通の呼称で把握することになった。これは民族に関係ない共通の国民名称を創出することで、諸民族の文化の多様性を認めつつ、諸民族の融和による国民統合のためのアイデンティティ形成を目指すための一手段として規定されたものであった。このように、1997 年憲法は国民統合を究極の目的に据えて、民主的な国家をアピールし、国際社会への復帰や経済回復を目指すことが意図されて制定された[東 1999b]。

この憲法は国際社会からも民主的な憲法として高く評価された。フィジー人とインド人という分離された民族集団の並存・存続を固定したまま強制的な国民統合を試みた 1970 年憲法の体制、フィジー人のみを国民とみなしてインド人を排除する 1990 年憲法の体制から、1997 年憲法は国内の民族コミュニティの存在を認めながらも、それを「フィジー諸島国民」の名のもとに国民概念で統合する内発的な国民国家形成の可能性を示した[東 1999b]。インド人の海外流出によってフィジー人人口が再び逆転したことから、インド人に国を乗っ取られるという「不安」も軽減されていた[東 1999b]。賛否両論はあったが、対立関係にあったフィジー人とインド人は 1997 年憲法の新しい体制のもと、互いに歩み寄りを始めて協調していくものと期待された。

(4)「フィジー人の至上権」の絶対性：2000 年クーデター

1999 年 5 月、新憲法制度のもとに総選挙が行われた。下院の全 71 議席中、労働党が 37 議席を獲得し、インド人の労働党党首マヘンドラ・チョードリー (Mahendra Chaudhry) が首相となる予想外の結果が生まれた。このような結果となったのは、フィジー人が 5 つの政党と無所属に分かれて投票した一方、インド人が労働党にまとまって投票したためであった[東 2000]⁽¹⁰⁾。

チョードリー首相は組閣にあたって 18 名の閣僚のうち 12 名をフィジー人に任命することでフィジー人に配慮した人事配置をおこなった。こうして 1997 年憲法が理想とする多民族による政府が実現し、フィジーの国民統合はまもなく達成されるかと思われた[東 2003:147]。しかし、橋本が指摘するように 1987 年と同様にインド人中心の政権を容認する土壌は 12 年間でフィジー人のあいだにできあがっていたと考えられるが、首相の地位がフィジー人以外に占められることを容認する準備はできていなかった[橋本 2005:201]。フィジー人はチョードリー政権が農地政策をはじめとする諸政策においてインド人を優遇していると不満を持ち、憲法でフィジー人の至上権が保障されていても首相がフィジー人でない限りその権利は保障されないとの懸念を強めていった[東 2003:148]。

2000 年 5 月 19 日、ジョージ・スペイト (George Speight) は国会に侵入し、チョードリー首相らを人質にとって政権の奪取を宣言した。独立から 30 年目にして 3 度目のクーデターの発生であった。スペイトはチョードリー首相の解任、ラトゥ・マラ大統領の辞任、フィジー人の権利を強く保障した新憲法の作成を要求して、フィジーをフィジー人の手によって統治することがクーデターの目的であると宣言した[橋本 2005:185; 東 2003:148-149]。その後ラトゥ・マラ大統領がチョードリー首相の解任と暫定政権樹立の方針を発表し、同年 5 月 29 日にはフランク・バイニマラマ (Frank Bainimarama) 暫定軍事政権が誕生した。7 月 4 日にはバイニマラマによってライセニア・ガラセ (Laisenia Qarase) を首相としたフィジー人のみで構成される新政権が発足した。暫定政権に反対するスペイト支持のフィジー人は各地で抗議行動を勃発させたが、7 月 9 日にバイニマラマ国防軍事司令官とガラセ暫定首相と反乱者のあいだで人質解放に関する「ムアニカウ合意」が結ばれると、その後しばらくして事態は一旦収束をむかえた[橋本 2005:183-192; 東 2003:148-149]。

インド人が経済を握り、フィジー人が政治を握っていたには、両者の均衡は保たれ、

一見調和のとれた社会が出現したように見えた[橋本 2005:15,245]。しかし、今回のクーデターでは、政治権力が少しでもインド人に傾くとフィジー人が求める「フィジー人の至上権」を満足させることができないことがわかった。憲法にフィジー人を優遇する規定を設けるだけでは不十分で、首相と大統領という2つの地位をフィジー人が占め、政治における絶対的決定権を完全に掌握してこそ「フィジー人の至上権」が確立されるのである。フィジーは紆余曲折を経てさまざまな国民統合政策を実施してきたが、フィジー人が満足する絶対的な「フィジー人の至上権」の確保が国民統合達成の大前提であることが確認された。

(5) 国民統合の行方：2006 年クーデター～現在

2000 年のクーデター以降、新しい憲法を成立させる動きもあったが、1997 年憲法の廃止は違憲であり、1997 年憲法は依然として有効であるとの高等裁判所判決によってその存続が決まり立憲政治が回復した。2001 年には総選挙でガラセが正式に首相に就き、2006 年の総選挙においても再選されて、民主的に選ばれた政府と多民族からなる内閣による国家経営に期待が寄せられていた。民族問題や経済問題など諸問題は未解決であったが、国民統合達成にむけた体制が誕生するたびにクーデターが起こるといふクーサイクルはもう再発しないものと考えられていた。しかし、2006 年 12 月 5 日、バイニマラマ軍指令官によって 4 度目のクーデターが発生した。2000 年クーデターの後処理をめぐってかねてから対立していたガラセ首相とバイニマラマ軍司令官の争いが表面化したもので、前者によるフィジー人を優遇する政策やその他汚職に対して、後者がやむをえず「クリーンアップ・キャンペーン」を実施するという名目で起こしたクーデターであった。

今回のクーデターは、しかしそれまでとは違う様相を示していた。ガラセ首相によって再びフィジー人の民族主義路線へ回帰しようとしていた政治に歯止めをかけたとして、以前はクーデターに反対していた人々がそれを支持したのである。以前のようにフィジー人が「フィジー人の至上権」を求めて政権を奪取するという流れではなかったことが一番の特徴である。しかし、クーデターの目的が以前と異なるとはいえ、違法な手段で政権を奪ったことには変わりなく、結局のところこれまでと同様にフィジー社会のなかに分断を生み出していることにも違いはない[丹羽 2007]。

フィジーはクーデター後 2009 年に総選挙を開催することを宣言していたが、その実

現はされず、2014年に延期された。また、2008年に高裁が軍事政権を違憲としたことをうけてイロイロ大統領は1997年憲法を廃止してバイニマラマ軍司令官を暫定首相に就任させた。国外からの批判は高まっており、2009年には英連邦から再び資格を停止され、太平洋島嶼諸国フォーラムの参加資格も剥奪された。経済不振が続き、国内の不満も高まっているなか、フランケルとファースはフィジーの将来に関して以下の3つの方向性が考えられるという。1) 軍事権力が長期的に強化されて高圧的な軍事政権によるフィジー支配が開始される、2) 2000年クーデターと同様に比較的早くに立憲政治に復帰する、3) 可能性は低いが政治的混乱と経済不振が続き、クーデターの発生を繰り返す[Fraenkel, Firth 2009:452-456]。2000年クーデターの後、クーサイクルは終結しフィジーは安定すると思われた、2006年のクーデターでその楽観的見解は否定された。今後、フィジーは全国民が納得する憲法を制定し、安定した国家を築くのか、再度クーデターを繰り返す不安定な道を進むのか、現時点では予測不能である。

2008年12月には、国民統合にむけた枠組み作りとして人民憲章が発表された。フィジーが独立以来目指してきた国民統合が達成されるか否かは、人民憲章が主要目的のひとつとする国民的アイデンティティの形成にかかわっている。さまざまな国民統合政策が試され、3つの憲法を経験してもなお政治体制が確立されない状況において、国民統合の達成は憲法改正ではなく、国民の意識改革から現実化するものであろう。国民統合の条件である、全国民が合意した「フィジー人の至上権」と「インド人の平等」が両立する状況を作り出すために、フィジー国内のすべての人々が共有する国民的アイデンティティを作り出すことがフィジーの将来の鍵を握っている。

第3章 フィジーの国民統合とアイデンティティ

第2章で概観したフィジーの歴史は、国民統合にむけた体制が整うたびにクーデターによって頓挫をきたすという繰り返しの歴史であった。その背景には民族アイデンティティを根拠に互いの主張をぶつけ合い民族主義的な方向収斂していくフィジー人とインド人の民族間関係があった。民族アイデンティティは集団が共有する文化を通して表現される本質的な表象と、社会的な相互作用や社会制度によって社会構築論的に表象される2つの形態が相互に作用し、状況に応じて常に再構築されるものである[Ratuva 2002a:13]。そして、エリクソンが「エスニック・アイデンティティ」は、脅かされたと感じた瞬間きわめて重要になる。(中略) エスニック・アイデンティティの表出は、(中略) 政治的闘争のための象徴的な道具ということである[エリクソン 2006:150]というように、フィジー人とインド人は互いの権利が相手民族によって侵されるという脅威を感じるたびに民族アイデンティティのもとに団結し、対立し合っで民族間の亀裂を深めてきた。国民統合を目指すなか政治混乱が続き、皮肉にも民族アイデンティティの主張が高まった。また、国民のあいだでも民族の差異ばかりが強調される。異なる民族アイデンティティが存在する社会で、フィジーはどのように国民的アイデンティティ形成の機運を高めていけるのだろうか。第3章では、まず民族アイデンティティが形成されてきた背景を探り、それがいかに政治動員されて強化されたのかを検証する。さらに、異なる民族アイデンティティが併存するうえで国民統合を進めるフィジー社会の現状を明らかにし、民族アイデンティティに変化がみられる都市の状況を分析する。

1. 民族アイデンティティ

(1) 民族アイデンティティの形成

前述のようにフィジー人とインド人は異なる文化背景を有している。宗教に関しては、フィジー人の98.8%がキリスト教徒であるのに対し、インド人は72.9%がヒンドゥー教徒、16.3%がイスラム教徒である[Fiji Islands Bureau of Statistics 2008:9]。言語的にはフィジー人がフィジー語、インド人がヒンディー語を主に使用する。また、土地に対する認識にも両民族間で大きな差がある。インド人が土地を生活するための手段

ととらえる一方、フィジー人にとって土地は単なる土地ではなくさまざまな社会的・文化的概念が付与される「ヴァヌア(vanua)」と解釈される。ヴァヌアはその土地に関係する動植物などの自然や、そこに地縁関係を持つ人々と彼らの伝統や慣習、社会制度などさまざまなものを含む概念であり、フィジー人はそれぞれ属するヴァヌアにおいてヴァヌアを所有する「タウケイ（所有者）」とみなされる[Ravuvu 1983:70]。フィジー人のアイデンティティの根幹にはこのヴァヌアのある概念がある。インド人がフィジーに移民してきてから約130年経ったが、インド人は依然として独自の文化を固持し続けているし、両民族の相互理解や交流も限られている。

フィジー人とインド人は、宗教を重んじること、男尊女卑、見合い結婚など文化的な共通点を持っているが、これらはほとんど無視されて文化的差異ばかりが強調される[Geraghty 1997:18]。そして、両民族は文化的固有性に関する標準化された観念に基づいて、他の集団に対峙する文化的に独特な自分の集団を認識し、他集団との境界線を築いてきた。

フィジー社会は「人種」⁽¹¹⁾によって規定されているともいわれるように、「人種」という範疇が他の国にはみられないほどに多用される[Naidu 2005:48]。出入国審査カードをはじめとした各種書類にしばしば「人種」を選択記入する欄があることや、メディアや日常生活でも「人種」が話題になることが多いことからわかるように、人々はまず、どの「人種」に属するかによって認識される。この「人種」というラベルによって、両民族は互いにステレオタイプ化したイメージを「人種」に付与してきた。フィジー人はインド人という「人種」に欲深く個人主義でずるがしいというレッテルをはり、インド人はフィジー人という「人種」に怠惰で愚鈍な「ジュンガリ(jungali=ジャングルに住む野蛮人)」というレッテルをはる[Ratuva 2002:20-21]。こうして「人種」はその内部の多様性が無視されて同じ性質を持つ個人によって構成されるものとして固定化された。さらに、「人種」範疇は法律で合法的に規定されてきたため、フィジー国民は当たり前のように「人種」で人を区分してきた。そして、自分が属する「人種」への帰属感情とそれを構成する人々との共属感情(「われわれ意識」)、つまり民族アイデンティティを築いてきたのである。

しかし、以上のように文化的に規定され変更不可能と思われる「人種」範疇は実は操作可能なものであり、ゆえに民族アイデンティティは状況によって変化するものである[エリクソン 2006:53]。フィジーにおける民族アイデンティティもさまざまな社会

的要因によって形成されたのではないだろうか。次項で検討する。

(2) 民族アイデンティティの政治動員

「厳密に言えば、私たちの誰ひとりとして「純粋なフィジー人」であるということとはできない。(中略) フィジー人という語は、私たちがある文化的、政治的、イデオロギー的な利益を得るために社会的に構築されたものである[Ratuva 1996:13]」。

多くの先行研究は、現在のフィジー人とインド人の民族アイデンティティが植民地政府の政策により、便宜上つくり出されたものであると指摘する[Naidu 2005:48; Ratuva 2002:178-180 など]。フィジー人のアイデンティティはごく身近の地域的・血縁的要素により形成されていたが、植民地政府は大首長会議を設置して統一的に間接統治することで、地域全体に首長の権力を象徴としたひとつの民族としての意識を喚起した[Ratuva 2002:14]。同様に、カースト制度や宗教によってインド人のアイデンティティはばらばらであったが、カーストや宗教に関わらず同じ空間において過酷な労働を強いることで共通の経験を持たせ、「インド人」としての共通アイデンティティを生み出した[Ratuva 2002:17]。植民地政府は地域や宗教ごとにばらばらであった両民族それぞれのアイデンティティを同質の集団的アイデンティティに統一することで、民族内部の結束を高めて内部分裂を阻止し、国家の安定を図ったのである。

また、両民族が民族の枠組みをこえて団結し、政府に対抗することを阻止するために、対立的な民族アイデンティティを形成させることをもくろんだ分割統治政策が行われた。相互の交流を絶たれた両民族は、互いに自民族の利益のみを考慮した政治意識を高めて、それぞれ自民族中心的なアイデンティティを発達させていった。また、フィジー人は経済的に劣位におかれ、一方のインド人は土地所有権が認められなかったために両者は経済や政治的利権を争って、さらなる対立を深めた。文化的な境界線に加えて法律によって政治的な境界線が両者のあいだに設定されたことによって、両者は完全に分断された対抗的な民族アイデンティティを形成していった[Norton 1977:13; Ratuva 2002:14]。

このように民族アイデンティティは文化的特徴によってのみならず、政治的要因によって操作され変容していくものといえる。伝統的に両民族が共有していると思われていた民族アイデンティティは、植民地政策によって作り出された後、伝統的に昔から存在する本源的なものとして広くフィジー国民に受容されていった。

さらに、両民族の敵対的な民族アイデンティティは、民族主義者によって政治利用されることでいっそう強化されたと考えられる。民族主義者たちは土地の所有権などの主張を正当化する、しばしば神話や歴史を引き合いにだし、それを捏造して民族アイデンティティを喚起する。以下はその例である。

フィジー人がまさに聖書で言及されている「イスラエルの失われた 10 支族 (the Lost Tribe of Israel)」であると主張する神話が創造される。これは、神に土地の支配権を付与されたイスラエル人と同じようにフィジー人が「選民 (Chosen People)」であるということである。フィジー人を「選民」であるとする考えは、クーデターを支持するメソジスト教会の原理主義的な聖職者が民族主義者の支持を結集し、クーデターに正当性を与えるために広めたものである。(中略) また、ランプカはエジプトから奴隷状態のイスラエル人を解放したモーセと関係づけられる[CCF 2001:31]。

土地の所有権や政権は神がフィジー人のみに与えたものであるから、フィジー人がそれを永久に保持することは当たり前である。インド人に権利を譲ることは神を冒涇する行為と同じであるから、何世代が経ていようがインド人が権利を得ることはできないということを教え込むと、熱心なキリスト教徒であるフィジー人はそれを信じ、民族主義を支持する。

また、その他に民族主義者は両民族の「不安」を利用して民族アイデンティティを喚起し、クーデターの支持者を獲得してきた。第 2 章で述べたように、フィジー人とインド人はお互いに「至上権」と「平等」を主張してきたが、その背景には両者がともに感じる「不安」があった。フィジー人はインド人が経済・政治において権力を獲得し、自分たちの所有する国 (ヴァヌア) を乗っ取るかもしれないという「不安」を、インド人は何世代たっても土地の所有権を得られず「二級市民」の地位しかえられないのではないかという「不安」を抱いていた。エムデ[Emde 2005]は、2000 年クーデターの首謀者がこの「不安」と「うわさ (rumour)」を利用してフィジー人の支持を得ようとしたことを指摘している。

エムデの論の要約は以下の通りである。2000 年のクーデターでは「インド人がフィジーを植民地化しようとしている」「チョードリーはインド政府と連携してフィジーを

インドに合併しようとしている」などの「うわさ」が全国に広まり、フィジー人の「不安」をあおった。「不安」は敵対心を生む強力な力を有していて、多くのフィジー人は「うわさ」を信じてインド人に敵対心を抱き、ひとつの民族として脅威に対抗していく連帯感を高め、クーデターを支持した。また、クーデターの首謀者であるスペイトは、フィジー人の「不安」と国際的な先住民の権利保護の言説を巧みに組み合わせてフィジー人の民族アイデンティティを刺激し、クーデターの正当化を試みた[Emde 2005: 392--397]。

フィジーでは「うわさ」の影響力が非常に大きい。口こみで広がる「うわさ」は現地の英語で「ココナッツ・ワイアレス (Coconut Wireless)」言われ、ラジオ以外のメディアを有していない村落においては特に重要な情報源となる。普段、政府や他の地域のフィジー人とのつながりを意識する機会がほとんどない村落部の人々にとって、「うわさ」は自民族の状況を知り、遠く離れた人々とのつながりを感じて民族アイデンティティを意識する契機ともなってきた。

これまでみてきたように民族アイデンティティは固定的なものではなく、その時々状況に合うように、操作され再生産されてきた。そのため、中産階級の成長や民族内部の分裂の高まりという新しい社会状況によって既存の民族アイデンティティは変容し続けており、最近では民族アイデンティティの統一性の欠如が疑われている。しかし、それでも民族アイデンティティは民族主義者によって巧みに政治動員されるなどし、弱体化することなく保持されてきた。植民地時代から 130 年以上にわたって「人種」範疇が制度化されてきたことによって、人々はフィジー国民として共通のアイデンティティ（国民的アイデンティティ）ではなく、別々の民族アイデンティティによって自己を認識してきたのである。フィジー国民としての共通意識の希薄さが、国民統合を妨げてきた。

2. フィジー社会の矛盾

フィジー政治の最大にして最も根本的な問題は、各民族の独自のアイデンティティを保持しようとする一方で、同時に国民的アイデンティティ形成による国民統合を目指しているという矛盾である。植民地時代から憲法やその他の政策によって意図的に各民族を分断して文化を保持しようとする政治が行われてきたことは既に述べた。当初は同一国家内で各民族に独自の民族アイデンティティ形成を促して多様性を尊重す

ることは、ゆくゆくは国民統合につながると考えられていた。独立後に同盟党が行った「多文化主義」路線の国民統合はこのような考えに基づいて行われたものであった。

しかし、同盟党の「多文化主義」政策は失敗した。「多文化主義」が効果的に働いて国家に安定をもたらしたのは、「フィジー人の至上権」が確保されているのみであった。多民族で構成されていようが、民主的な選挙で全国民から選出されていようが、フィジー人の政治における「至上権」を脅かすような政権はフィジー人にとって絶対的に受け入れがたいものであった。1970年・1997年憲法は「多文化主義」を掲げて、かつ「フィジー人の至上権」も確保し、国際的にも認められる民主主義憲法であった。しかし、両方ともフィジー人以外の権力がフィジーを支配することが可能であり、「フィジー人の至上権」を脅かすとして、それぞれ1987年、2000年クーデターによって破棄されている。国際社会が認める民主主義は、フィジー人が考える民主主義と異なっていたことが明らかになった。

橋本は、『クーデターをめぐる主張された「民主主義」には3種類みられた[橋本 2000: 70]』と提起する。まず第1にフィジー人が考える「民主主義」がある。それは首長制度を前提にしている、血縁関係を基本に選ばれた首長による「民主主義」である。第2は、インド人が考える「民主主義」である。普通選挙によって選ばれた議員による「民主主義」で、土地所有の自由化を目指す。第3の「民主主義」は西欧諸国が主張するものである。個人主義と自由、平等に基づく「民主主義」で、クーデターを反民主主義的であると批判した[橋本 2000: 71]。

以上からわかるのは、民主主義は提起される主体によってその内容が異なるということである。フィジー人の「民主主義」は、インド人や西欧諸国にとってはフィジー人の利益を偏重した「民族主義」ととらえられる。一方でインド人や西欧諸国の「民主主義」は、平等主義や個人主義によってフィジー人の文化を無視した「民族主義」とであるとフィジー人とらえられる。「民主主義」を主張しているようで、視点を変えればそれは「民族主義」の主張となる。民主主義をめぐる言説にも矛盾が存在している。

伝統と近代化、共同体主義と資本主義、民族アイデンティティと国民的アイデンティティ、「フィジー人の至上権」とインド人の「平等」、フィジーはこれらの矛盾する要素を植民地時代から多く持ち続けている。その矛盾を解決する方法として、フィジー人が「至上権」を諦めるべきだとする論者もいれば、インド人が「二級市民」の地

位を受け入れて「平等」を諦めるべきだとする論もある。フィジーで国民統合を達成するには矛盾する要素のどちらかを諦めなければいけないのだろうか。両者が共存することはできないのだろうか。

フィジーの歴史が明らかなのは、どちらかを諦めても結局議論は引き起こされるということである。国家が多文化主義と平等を選択すれば、フィジー人のアイデンティティが脅かされていると民族主義的な議論が展開される。一方、文化的差異を強調し、「フィジー人の至上権」を選択すれば、インド人は差別されていると感じて多文化主義と平等を訴える。それぞれの民族が自民族の利益だけを考えて行動する限り、どのような政策もそれぞれ別個に解釈されて賛成と反対の議論が同時に発生するのである。

この議論に関して革新的な考えを示すのが、ラトゥヴァの「シンクレティック社会」論⁽¹²⁾である。ラトゥヴァはシンクレティック社会とは、一見矛盾しているが、一方では調節し合っているようなさまざまな要素から成る社会であり、その典型がフィジー社会であるという。多文化社会を目指す一方、それぞれの民族文化の保持を試みる。民主主義的な憲法や制度が機能しているにもかかわらず、「フィジー人の至上権」を主張した民族主義的な政治運動が起こる。近代的な政治制度を組織しようとする一方で、伝統的な首長制度が保護される。土地所有を自由化しようとする意見があれば、一方でフィジー人の独占的所有権を維持しようとの意見が強まる。このように、どちらかが強まれば、他方もあいまって強められ、どちらも強くなりすぎることなく、結果的にバランスがとれている。ある状況では矛盾しているようにみえる要因が、同時に別の状況では調節し合ってフィジー社会を動かしているとラトゥヴァは主張する[Ratuva 2002b:5-7]。

確かに、対立しているフィジー人とインド人が互いの長所を生かして協力し合っているような、矛盾と調節が同時に働く状況が実社会にみられる。たとえば、それぞれの民族が抱くステレオタイプがある。フィジー人はインド人をずるがしこく、自己中心的だと思っているが、同時に勤勉で教育熱心だと評価もしていて子どもをインド人の学校に通わせたがる。また、インド人はフィジー人を怠惰で愚鈍だと思っているが、同時に友好的で親切であるとも思っている。インド人は観光やビジネスの場でフィジーが友好的な国であることをアピールして客を得ている。対立しているフィジー人とインド人は表裏一体で根底では密接に関係し合っているのである。民族対立が続いて

いても紛争にまで発展しないのは、このような矛盾と調節の同時的な動きがあるからと考えられる。

フィジー社会がかかえている矛盾は、どちらかの要素を切り捨てる必要はない。社会には多くの基準が存在するが、それは流動的に変化するものである。「フィジー人の至上権」を前提とした「民主主義」も基準を変えれば「平等」な「民主主義」と判断できる。実際にインド人のなかには「フィジー人の至上権」を認めて、そのうえで「平等」を達成しようという動きもみられる。矛盾を否定的にみるのではなく、そこから肯定的要因を見つけ出そうとすることで、国民統合に向けた兆しが発見できるかもしれない。

3. アイデンティティの実際

(1) 都市の矛盾

都市では村落部で分離して生活していたフィジー人とインド人のあいだに日常的な交流が生まれる。長年敵対し合ってきた両民族が、同じ職場で同僚として、同じ学校で同級生として、同じアパートで隣人として生活するようになる。さらに、ヨーロッパ人や中国人、南太平洋諸国の人々との交流も生まれ、さまざまな民族、言語、文化、慣習に出会う。

村落では首長を中心とした伝統的な相互扶助社会で生活していたフィジー人は、都市では新たな社会関係に組み込まれる。都市において権力を持つのは首長ではなく、学歴や財力を持った者である。職場の上司は他の民族であるかもしれないし、自分より低い階級の出身かもしれない。村落における伝統的な社会関係とは異なる新たな社会関係が成立する。村落では相互扶助や地縁関係を重視した「ヴァカヴァヌア (*vakavanua*, the way of land)」という生活観念に基づいて生活していたが、都市においては個人主義や資本主義、物質的利益を重視する「ヴァカイラボ (*vakailavo*, the way of money)」の観念が支配的である[Emde 2005:399]。

そのような都市で最初に根をはやし始めたのが、「行政や教育・経済の整備や拡大を背景に、都市で急増したホワイトカラーたち[春日 1990:164]」、すなわち中産階級であった。彼らは、「高等教育をおさめ、インド人と対等にわたりあい、しかもチーフたちへのこの上ない忠誠を示すはずのあたらしいフィジー人[春日 1990:165]」であり、1950年代から都市に増え始めた。

彼らの生活様式は村落のそれとは大きく異なっていた。村では塀がなくドアも開けっぱなしで、3 世代が一緒に暮らすことは当たり前であったが、都市の家では頑丈な塀や柵を設け、ドアは施錠し、核家族化が浸透した。フィジー人は貯金をするという考えほとんどなかったが、中産階級はお金の管理に厳しく、貯金をして財産を管理するようにもなった。子どもの教育にも熱心で、学歴を重視するようになった。

相互扶助より金銭志向が強まると、民族を超えた階級同士のつながりが生まれ始めた。労働条件の改善という同じ目的を持ったフィジー人の中産階級とインド人の中産階級が手を組んだ。フィジー人のなかにも格差が生まれ、民族内部の階級対立が芽を出し始めた。

新しい生活様式を発達させるなかで、伝統的な生活様式からより近代的な生活様式に慣れ親しみ、文化的にも両民族の交流が生まれ始めた。映画館やナイトクラブ、年1 度の祭りであるハイビスカス・フェスティバルなどのイベントではフィジー人とインド人が同じ空間で同じものを楽しむ。協力して仕事をしたり、一緒に学校行事に取り組んだりするなかで民族を超えた仲間意識や友情が生まれた。

また、ギャラティはインド人の変化について、「インド人のフィジー化」が進んでいることを提起する。彼は、インド人がスル（フィジー人の民族衣装）を身につけたり、フィジー語の単語を取り入れて母国インドで使われているのとは異なる「フィジアン・ヒンディー語」を発達させていることや、キリスト教に改宗するインド人もわずかながら増えていることを指摘し、インド人がフィジーの文化や慣習にうまく順応しているという[Geraghty 1997:17-20]。

筆者も留学中に両民族のあいだに友好関係が築かれていると認識する経験が多くあった。USP のキャンパスでは、インド人とフィジー人が交ざった友人グループはいくつもあったし、筆者自身もフィジー人2 名とインド人1 名の3 人グループといつも行動していた。フィジー人とインド人は協力して課題に取り組み、食堂や事務室では一緒に働いていた。教会でインド人とフィジー人が手を取り合って一緒に賛美歌を歌う姿をみたり、好んで毎日スルをはくインド人の友人がいたり、ラグビーに熱狂するインド人がいたり、ギャラティのいう「インド人のフィジー化」現象もみられた。リゾートやハンディクラフト・マーケットに行くと、インド人が「ブラ！（フィジー語のあいさつ）」と声をかけてきて、フィジー人の伝統工芸品を売っていた。

ギャラティはこれらの現象を受けてフィジー人とインド人の文化融合が進み、両者

が「フィジアンネス」を共有しつつあるという。しかし橋本が指摘するように、この文化交流は表面的なものともいえる[橋本 2005:250-252]。先に民族を超えた友人関係がみられると述べたが、実際にはそれは一部だけで、南太平洋大学でも基本的にインド人はインド人、フィジー人はフィジー人と行動していた。友人たちに話を聞くと、小学校や高校でも基本的に他の民族と行動することはないと言っていた。また、スポーツにおいても、フィジー人はラグビー、インド人はサッカーという風に基本的にはわかれていた。ラグビーの大会でのアナウンスはフィジー語のみであった。インド人のラグビー選手はインド人のみで構成されるチームでプレーし、彼らが試合している、フィジー人は「インド人にラグビーができるわけない」などと言いながら観戦していた。

両民族が交流する場においては互いの敵対心をむきだしにしたり、ステレオタイプを口にして罵倒したりすることはなく、共に働き共に学んでいる。しかし、相手民族に対する偏見は少なからず心に持っていて、フィジー人またはインド人のみで行動している時は、それを持ち出して文句を言ったりする。ランプカは「われわれは共に生活しているが、それでも別たれている。われわれが同じになることは決してない (We've been living together but we are still different. We will never be the same.)」と語った⁽¹³⁾。生活の場を同じにして交流が進んでいても、ひとつの国民であるという意識が育まれることはほとんどなかった。

「都市は、さまざまな矛盾が顕在化するところである [橋本 1993:69]」。文化の交流が進み、他の文化を知れば知るほど、自分の文化との差異を意識するようになり、逆に民族主義が生まれる。表面上は友好的な関係を築いているように見える両民族が、ある場面では敵対し合っている。都市は矛盾に溢れている。

(2) 矛盾のなかに生きる都市の若者

現在のスバの若者は 1950 年代に増え始めた中産階級の第 2、第 3 世代で、都市で生まれ都市で育った者が多い。彼らは、幼少期から他の民族と日常的に交流し、英語を頻繁に使い、テレビや雑誌などのメディアが身近にある環境で育ってきた。若者は一般に順応性が高いといわれるが、言語、宗教、職業、服装、恋愛などの自由が存在し、さまざまな個性の表現がなされる都市で育った若者は、なおさら新しいものへの順応性が高い。さまざまな文化が出会い、日々新しいものが生まれる都市において、彼ら

は自分たちの伝統や文化をどのようにとらえているのだろうか。また、生まれた頃には既に存在していたフィジーの民族対立や政治的混乱をどのようにとらえているのだろうか。以下は、筆者が行ったインタビューで明らかになったことである。

フィジー人とインド人は両民族ともに文化がアイデンティティの基盤をなすと考えている。フィジー人男子学生 A（19 歳）は次のように語った。

文化は私自身が誰であるかを規定するものである。文化なしでは、ひとりの人間として未完成になる。相互扶助の精神や、ヴァヌア、フィジー語、すべてが私にとって大変重要である。

ほとんどの若者が、文化は「大変」重要であると答えた。また、「文化」というとき、それが意味するものはフィジー国民として文化ではなく、それぞれフィジー人の、またはインド人の文化を意味していた。

宗教もアイデンティティを形成する重要な要素である。フィジー人男子学生 B（19 歳）は次のように述べた。

私たちの文化はキリスト教によって強化される。相互扶助の精神も、ヴァヌアへの愛着も、神によって導かれたものである。キリスト教の精神のもと、私たちは結束して豊かな文化を築いてきた。

若者は宗教が文化の一部であるとみなす場合が多い。キリスト教徒であるインド人は文化と宗教を別々にとらえているが、その場合も文化と宗教それぞれがアイデンティティ形成に重要な役割を担う。

そして、都市の若者は村落の伝統的な生活を経験していなくとも、文化の知識は十分にあるし、文化を軽視するようなことはないという。学生 A は次のように述べた。

私はラミ（スバから車で 15 分程の隣町）で生まれ育ち、自分の出身である村落（サブサブ島のカサウ）に今まで一度も行っていない。しかし、私は出身地を聞かれればカサウと答える。私たちは都市で生まれ育ったとしても、遠く離れた村落とのつながりを忘れたことはない。都市に住んでいてもフィジー文

化をよく分かっているし、できれば将来は出身の村落で生活したいと思っている。

一方で文化を大切にしているし、村落とのつながりも強く意識しているが、現実的に都市から村落に移り住むことはないだろうと考える人も多い。都市にはより良い仕事や教育の機会があり、村落に戻りたくとも戻れない現実がある。また、村落では着る服も、娯楽もメディアへのアクセスも限られている。都市の生活に慣れた若者が村落の生活に適合することは難しくなっている。

都市で新たな様式の生活を送り、さまざまな文化の影響を受けるなかで、自分の文化を保護する必要性について、フィジー人男性 C（32 歳）は以下のように述べた。

私たちの文化は危機にさらされている。多様な文化が都市には溢れていて若者は新しい文化に順応してフィジー人の文化を忘れていく。社会の変化は止めることができないが、若者の文化離れを止めることはできる。言語やしきたりを忘れないように文化を保護しなければならない。

自分の文化を手厚く保護するべきだと説いた一方で、C は他の民族の文化については排除する必要はなく、尊重するべきだと述べた。C 以外にも、他の民族の文化はどれも独特で尊重されるべきであるとする意見が多数ある。フィジー人女子学生 D（24 歳）は次のように語った。

フィジーは文化的に豊かな国である。私は自分の文化に誇りを持っているが、他の文化もそれぞれ独特であると思うし、尊重している。フィジーの人々はすでに多文化主義を受け入れている。たとえば、フィジー人はカレーを食べるのは当たり前になっているし、インド人がキャッサバやココンダやロボを食べるのも普通である。このことは、他の文化を受容しながら自分の文化を保持し続けることもできるという証拠である。

都市の若者は、都市では多様な文化が共存しており、それぞれの文化は尊重されている。すでに多文化社会が成り立っていると考える人が多い。また、都市では

民族対立について問うと、一方では楽天的な意見が聞かれた。フィジー人男性 D (23 歳) は、次のように述べた。

フィジー人とインド人は仲良く暮らしている。インド人は私の隣人であり、兄弟である。対立することもないし、互いの文化を尊重している。ディワリ（インド人の祭り）のときはインド人の家に行って一緒に祝うし、食べ物を交換したりもする。問題など何もない。

また、インド人男性 E (19 歳) は次のように述べた。

普段、個人のレベルでインド人とフィジー人が対立していると思うことはない。でも現実にはそうでないことがある。対立することなく生活できるのに、クーデターや暴動が起こると小さな子どもまで人種差別的な言葉で私たちを罵倒する。子どもたちは親から学ぶ、ということは家庭で「カイ・インディア (Kai India)」について差別発言がなされているということである。社会の緊張とけると、また以前のように友好関係が修復されて一緒にカヴァを飲む。

普段は友好的な関係にある両民族であるが、政治的混乱やもしくは日常生活レベルで言い争いが起こったとき、互いを蔑み合うような発言がなされる。インド人男子学生 F (18 歳) は以下のように説明する。

学校ではインド人もフィジー人も平等に扱われるし、冗談を言ったり仲良く話している。しかし、ちょっとした言い争いが起こると、フィジー人は「インド人は国へ帰れ！」という。「ここはお前の国じゃない」という声を耳にする。本心かはわからないが、このように言われると友情を疑う。

では、普段は敵対感情を持つことがないにもかかわらず、なぜ時に相手を蔑視する発言がなされるのか。ステレオタイプはどこから生まれるのか。インド人学生 G (19 歳) は敵対感情は自分が生み出したものではなくて、周りの環境に影響を受けて自分にインプットされたと以下のように説明する。

母親がフィジー人の友だちとは絶対に遊ぶなという。家に連れてくることは絶対に許されない。母親は、フィジー人は汚くて、ものを盗んだりするから関係を持たないほうがいいという。私の親友はフィジー人だし、私は彼らを汚いと思ったことなどない。しかし、母親には反抗できないし、フィジー人の友だちがいることは隠している。

また、フィジー人男性 H（26 歳）は次のように語る。

家の近くのフィジー人たちとカヴァを飲んでいるとき、年長の方がインド人は信用ならない奴らだと文句を言っている。インド人は絶対信用してはいけない。表面上は友好的であっても、それは何かをたくらんでいるからだ、と忠告された。私が仲良くしているインド人もみんなそうなのかなと思ってしまう。

フィジー人、インド人の文化は共に若者は年長者に従うべきという概念があり、フィジーの若者は発言力がない。親や年長者と異なる意見を持っていたとしても、それを発言することは躊躇され、年長者の意見は絶対であると教えられる。他民族への敵対感情やステレオタイプは自分の経験をもとに生み出されるのではなく、家族や地域の年長者から教え込まれて身につけたものである。また、周囲の影響を受けて敵対感情を抱く例がほかにもある。H は次のように語った。

繁華街を歩いていると近くを歩いていたインド人女性が私を見た途端にバックを強く抱えこんで早歩きをし始めた。私はただ歩いていただけであるが、彼女は私がひったくりをしようと思って警戒していたのである。フィジー人の若い男性というだけで、犯罪者扱いされる。

また、フィジー人男子学生 I（21 歳）は次のような体験をした。

私がインド人とサッカーをしていたら、フィジー人の友だちにカイ・インディアのやることをやっていると嘲笑されたので恥ずかしくなってプレーするのをやめた。インド人の女性友だちと歩いていてもフィジー人の友だちにからかわ

れる。恥ずかしいので、ひとりでインド人のグループの近くに立ったりしないようにしている。

個人的には他民族に対して差別感情や敵対感情を持っていなくても、周囲の影響でその民族が「自分とは違う種類の民族」であり、差別すべき対象であると認識させられたり、否定的なステレオタイプが付与されたりする。

(3) アイデンティティの揺らぎ

都市で生活する若者は、さまざまなジレンマにぶつかりアイデンティティの揺らぎを感じている。情報源が限られた村落とは違って、新しい情報へのアクセスが常にある。テレビや映画で西欧先進国の文化を知り、フィジーやインドの文化より拘束が少なく自由な文化にあこがれを抱く。一方で自分の民族固有の文化についても重要だと思っている。学校や街にいるときは西欧の文化を知らないと思われるが、村落を訪れる時は、伝統文化を知らないと思われ恥をかかされる。新しいものにあこがれを抱きつつも、伝統を捨てきれない、伝統か新しいものか、ジレンマに陥ってどちらに重きをおいていいのかわからず悩んでいる。

フィジーの若者は、フィジーの文化とインドの文化の融合を受け入れることができ、年長者より、より「他者」を理解することができるという[Vakaati&Kahn 2009:12]。他の民族に対してリベラルな意識を持ちながら、自分の文化と異なる文化を受け入れることで、若者は今まで固持してきた、あるいはさせられてきた民族アイデンティティの揺らぎを感じている。「文化」というとき、それはもはや自民族の文化ではなく、他民族の文化の影響を受けた、新しい文化を意味する。そして、従来の意味より広く自分にとっての「文化」の提議を考えて、伝統を重んじて変化すべきでないと考えてきた民族アイデンティティを再定義しようとしている。

といっても、社会で発言力を持たない若者が自分たちだけの力で民族アイデンティティを再定義することは容易ではない。従来の民族文化を保持しながら、新しい文化と融合していくために、どのようにアイデンティティを定義しなおせばよいのかわからず苦しんでいる。多くの若者がジレンマに苦しみ、アイデンティティの揺らぎを感じて、それを解消するためのリーダーシップを求めている。しかし、若者は従来のリーダーシップに懐疑的でもある。

若者がアイデンティティの揺らぎを感じ、もがいている状況は国民的アイデンティティ形成への肯定的な兆しとみなすこともできる。今まで凝り固まっていた民族アイデンティティから脱却して、アイデンティティの再定義を行い、フィジーが独立以来目指してきた国民的アイデンティティが形成されるかもしれない。それが実現するためには、従来のように政治的、宗教的に大きな権力を持っている者が示すアイデンティティ像を無条件に受け入れて目指すのではなく、悩みながら対話を繰り返し、自分たちで理想像を探し求めていくしかない。

第4章 国民的アイデンティティの形成に向けて

1. 人民憲章⁽¹⁵⁾

(1) 概要 [cf. 東 2008]

2008年12月15日、「より良いフィジーをつくるための国民会議(National Council For Building A Better Fiji : NCBBF)」(以下、国民会議とする)は、「改革、平和、及び進歩のための人民憲章(People's Charter for Change, Peace and Progress: PCCPP)」(以下、人民憲章とする)を発表した。バイニマラマ暫定首相の発案によって、過去20年間の4度におよぶクーデターとそれにとまなう経済不振を引き起こした統治体制を反省し、状況を打開する国家の根本的改革を行うために2007年から作成が行われてきた。発表までにはフィジーの政府システム、憲法、法律、経済などの改革に関する変更点について「国家及びその経済の状況に関する報告書(Report on the State of the Nation and the Economy (the SNE Report))」⁽¹⁶⁾(以下、SNE報告書とする)の作成、2008年8月のSNE報告書に基づいた草案発表という経緯をたどった[NCBBF 2008b: i]。

作成に取り組む国民会議は、バイニマラマ暫定首相とマタザ大司教(Archbishop Petero Mataka)が共同議長を務め、その他に主要政党、労働組合、業界団体、市民団体、地域評議会など代表メンバー45名で構成された。メンバーは、①良い統治(Good Governance)(法的・政治的・制度的・憲法的改革(Legal, Political, Institutional & Constitutional Reforms))、②経済成長(Growing the Economy)、③社会的・文化的アイデンティティ意識及び国民形成(Social Cultural Identity and Nation Building)について議論する3つの「国民作業部会(National Task Teams)」に分けられ、さらにその下に9つの専門調査委員会が設置された。メンバー以外にも各界から200名近い参加者があった他、国内の1000以上の村落で諮問が行われ、英語・フィジー語・ヒンドゥー語で資料が配布されるなど全国民の参加が強調された。また、国民会議とともに暫定政府とは独立して機能する組織として、全体の技術支援を行う「専門及び支援事務局(Technical and Support Secretariat)」が設置された。国民会議に招聘されたが参加を辞退する者もいた[NCBBF 2008b: i - iii]。

人民憲章の目的と7つの主要原則は以下の通りである。

「人民憲章」の主目的は、フィジーを人種差別がなく、文化的活気に満ちて一つにまとまり、よく統合された、真の民主国家として再建することであり、また能力主義に基づく平等な機会と平和を確保し、進歩と繁栄を求める国家にすることである。

この不可欠の目的を支えるフィジー再建のためのビジョンは、次の主要原則によって導かれる。①公正かつ公平な社会 (a just and fair society)、②統合と国民アイデンティティの達成 (achieve unity and national identity)、③フィジーのすべての市民のための能力主義に基づく機会の平等 (merit-based equality of opportunity for all Fiji citizens) ④透明で責任ある政府 (transparent and accountable government) ⑤すべてのコミュニティにおける恵まれない人々の地位の向上 (uplifting of the disadvantaged in all communities) ⑥近代的で進歩的なフィジーにおいてフィジー先住民を主流とすること (mainstreaming of the indigenous Fijian in a modern, progressive Fiji) ⑦精神性の共有と宗教を異にする者の間での対話 (sharing spiritualities and interfaith dialogue) [NCBBF 2008b: ii]

人民憲章は全 42 頁からなる。前文では、「私たちフィジー国民は、目を覚まし、立ち上がる、新しい夜明けにむけて、新しい 1 日と新しい道に向けて、永遠にひとつの国家として、ひとつの国民として、私たちはフィジー国民である[NCBBF 2008:1]」と謳われている。「価値、構想、そして原則の共有に基づく共通利益のための基礎 (Foundation for The Common Good Based on Our Shared Values, Vision and Principles)」では 8 つの項目が掲げられ、創造者としての神の存在などについて言及される [NCBBF 2008:3-4]。つぎに、「ともに前進するために (Moving Forward Together)」として、21 項目が掲げられる。ここでは、現在フィジーが抱えている問題が示され、その解決に向けての行動指針が述べられる [NCBBF 2008b:5-8]。

人民憲章の基幹部分が、「フィジー再建のための主要な柱石 (Key Pillars for Rebuilding Fiji)」である。11 の柱石が示され、そのなかで問題の所在と具体的な解決策が提示される。11 の柱石は以下の通りである。

- ①持続可能な民主主義と良好かつ公正な統治の確保 (Ensuring Sustainable Democracy and Good and Just Governance)、②共通の国民的アイデンティテ

ィの形成と社会的結束の構築 (Developing a Common National Identity and Building Social Cohesion)、③効果的で良識と責任のあるリーダーシップの確保 (Ensuring Effective, Enlightened and Accountable Leadership) ④公共部門の効率・遂行能力・有効性及びサービス提供の促進 (Enhancing Public Sector Efficiency, Performance Effectiveness and Service Delivery) ⑤持続可能性を備えたより高い経済成長の達成 (Achieving Higher Economic Growth While Ensuring Sustainability) ⑥生産及び社会的目的のためのより一層の土地活用 (Making More Land Available for Productive and Social Purposes)、⑦地方レベルにおける差別のない宅地開発 (Developing an Integrated Development Structure at the Provincial Level)、⑧2015 年までに無視できる水準に貧困を減少させること (Reducing Poverty to a Negligible Level by 2015)、⑨フィジーを知識に基づく社会にすること (Making Fiji a Knowledge-based Society)、⑩保健サービス提供の改善 (Improving Health Service Delivery)、⑪グローバルな人種差別の撤廃と国際関係の強化 (Enhancing Global Integration and International Relations) [NCBBF 2008b:9]。

人民憲章発表後の 2009 年 4 月に 1997 年憲法が破棄されたが、暫定政府は 2013 年 9 月までに施行予定の新憲法は人民憲章を基盤とすることを宣言している⁽¹⁵⁾。

(2) 国民的アイデンティティ形成のための提案[cf. 東 2008]

ここでは、人民憲章全体を通してのテーマである「ひとつの国家、ひとつの国民 (One Nation, One people)」の実現に最も重要であると考えられる、柱石 2 の「共通の国民的アイデンティティの形成と社会的結束の構築」を取り上げて、暫定政府が提案する国民的アイデンティティ形成の方針について以下に紹介する。

まずフィジーの重大な問題として、国民的アイデンティティとフィジー国民としての結束が欠如していることが明記される。フィジー国民は分割統治政策に端を発して民族間の差異を強調するようになり、ひとつの国民としての意識ではなく、民族アイデンティティの主張に偏重していることが指摘される。そして国民的アイデンティティを共有し、共通の利益を追求して共に前進していくために、一部の民族の利益だけを追求するような組織や制度は廃止されるべきであることが述べられる[NCBBF

2008b:17]。

次に以上の問題に対する 12 の具体的な解決策が示される。

- ① 名を「フィジー」とする、②先住民のフィジー人がタウケイであることを十分認識したうえで、すべての国民共通の呼称を「フィジー人 (Fijian)」とする、③共通の利益のための国民的道德観念を発達させる、④宗教の自由、異教徒同士の対話、精神性の共有を促進、奨励する、⑤国の教育カリキュラムを通して国民が共有する国民的価値観を促進する、⑥民族語の教授と主要宗教を学ぶことを確実にする。ロトゥマ語やバナバ語など少数派の南太平洋諸国の言語の教授と試験言語としての使用を可能にする、⑦多文化教育を推進する、⑧特定の人種を連想させるような組織の名称を徐々になくす、⑨国民的道德観念、対話、儀式、シンボルを促進する。国家行事における国歌斉唱と国旗掲揚、すべての学校での国旗掲揚を義務づける、⑩国家青年事業計画 (National Youth Service Scheme) の見直しと再活性化をはかる、⑪政府の記録書や登録簿のなかで人種に基づく不適切な区分はすべて削除する。しかし、VKB、先住民土地信託局、先住民土地委員会はフィジー人に限定されてはいるもの、影響を受けることはない、⑫コミュニティ間の対話と融合の原則[NCBBF 2008b:18-19]。

12 の解決策から以下の 2 つを取り上げる。ひとつめは、「先住民のフィジー人がタウケイであることを十分認識したうえで、すべての国民共通の呼称を『フィジー人 (Fijian) 』とする」という点である[NCBBF 2008:18]。SNE 報告書は、国民共通の呼称がないことは国民的アイデンティティの欠如を最も顕著に表しているとする。そして、フィジー人を継続して「タウケイ」と称し、他の民族もインド人を「フィジー系インド人」、中国人を「中国系フィジー人」と称するなどして各民族のアイデンティティを維持し、そのうえですべての国民が国民的アイデンティティとして共通の呼称を持つべきであるとする[NCBBF 2008a:11]。しかし、人民憲章では「タウケイ」を特別に認識することだけが文言化され、SNE 報告書で言及された「フィジー系インド人」など、他の民族についての記述はない。

次に注目すべき点は、政府の記録書や登録簿のなかで人種に基づく不適切な区分は

すべて削除するが、VKB などの土地に関する政府機関はフィジー人に限定されてはいるものの、影響を受けることはないと明記されたことである。支柱 6 の「生産及び社会的目的のためのより一層の土地活用」ではフィジー人土地所有者に土地の貸与を促すことが述べられているが[NCBBF 2008a:29]、土地制度の維持が明記されたことでフィジー人の土地所有権は保護されることになった[NCBBF 2008a:19]。また、「コミュニティ間の対話と融合の原則」の内容が、12 の解決策が挙げられた後に別記されている。すべての民族は平等に扱われ、それぞれの文化、歴史、アイデンティティが尊重されると繰り返し述べられているが、その記述の方法は、「タウケイとその他民族の」というようにフィジー人が特別に言及されている。ここでも「タウケイ」だけが記述され、インド人は「他民族」のくくりにとめられている。

(3) 国民の意見

人民憲章は国民参加型で作成することが謳われ、SNE 報告書や草案は全国に冊子が配布され、1000 以上の村で諮問が行われた。しかし、莫大な資金をかけて行った広報活動にも関わらず、その認知度は十分とはいえないのが現状である。

筆者がインタビューした 54 名中、人民憲章を読んだと答えたのは 35 名 (64.8%)、読んでいない・知らないと答えたのは 19 名 (35.2%) であった。また、読んだと答えた 35 名のうち、人民憲章を支持すると答えたのは 18 名 (51.4%)、反対が 15 名 (42.9%)、中立・分からないと答えたのは 2 名 (5.7%) であった。また、フィジータイムスが行った世論調査では、賛成 45.8% (755 名)、反対 46.2% (761 名)、不明 7.9% (130 名) という結果であった⁽¹⁷⁾。

賛成派、反対派の人数はほぼ均等であった。人民憲章を知っていても興味がなくて読まない若者もみられた。また、読んでいなくても「軍事政権が作ったものであるから違法である (フィジー人男子学生 A (20 歳))」、「どうせ実現不可能な多文化主義などを語っているだけで、人民憲章はゴミだ (フィジー人男性 B (25 歳))」と反対意見をとなえる人もいた。

賛成派は、多文化主義と平和な社会を目指しているから評価できるという意見がほとんどであった。中立派は、賛成派と同様に内容は評価しているものの、選挙で選ばれた議会が作ったものではないので違法であるとして中立の立場をとった。さらに、その理念に賛成はするものの実現可能性は低いと悲観的な意見も多数あった。

また、「フィジー人」を国民共通の呼称にすることに関しては民族に関係なく賛否両論に分かれた。

フィジー人はまず自分たちを「タウケイ」とであると認識している。「タウケイ」であることは神が定めたことであり、フィジー人のみが「タウケイ」となることができると考えている。フィジー人のなかで国民共通の呼称「フィジー人」に反対する者は、「タウケイ」を英訳したものが「フィジー人」と考える。他の民族が「フィジー人」と呼ばれることは彼らを「タウケイ」とみなすことで、それは神の意思に反し、またインド人が土地の所有者であることを意味するので容認できないと考える。フィジー人の反対派は、キリスト教の信条を引き合いに出す傾向がよくみられた。以下はそのような意見を代表する、あるフィジー人男性 C（28 歳）の意見である。

私は「タウケイ」とであると認識している。は土地の所有者である。それは神から与えられた身分である。「フィジー人」という語は、フィジーに存在する他のすべての民族から自分を「タウケイ」と区別する語である。もし、すべての民族が「フィジー人」と呼ばれたら、自分は他の民族と同等の身分になる。それは神にはむかうことであるし、のアイデンティティが傷つけられることになる。

これに対して「タウケイ」と「フィジー人」という語を別々にとらえているフィジー人は人民憲章に明記されているように自分たちが「タウケイ」であることが認識されていれば、他の民族を「フィジー人」と呼んでもいいと考えている。

賛成派は、インド人が何世代にもわたってフィジーに定住していることや、ほとんどのインド人がフィジーで生まれ育っていることから、共通の呼称を使うことが適切であると主張する。あるインド人女子学生 D（19 歳）は次のように述べた。

私の祖先がインドから来たのは事実であるが、わたしはフィジーで生まれ、フィジーで育った。そして、そのことを誇りに思っている。フィジーこそが私の母国であり、私は「フィジー人」と呼ばれたいと思っている。

また、インド人の父親とフィジー人の母親を持つインド人女性 E（24 歳）は、次のように語った。

私はずっとフィジー人だと思っている。フィジー語を話すし、フィジーの文化や慣習も知っている。ほとんどの友だちも私をフィジー人として見ているし、海外でもフィジー人と呼ばれる。しかし、出国審査カードの「人種」欄を記入するのはインド人を選択しなければならない。父親がインド人であることを知っている友だちは私をインド人だという。私は「人種」を聞かれたらフィジー人と答えるが、時に説明を加えなければならない場合がある。

キリスト教徒であり、フィジー語を話し、フィジーの文化を十分理解していても、VKBに登録されていないとフィジー人とはみなされない。2者の意見からは、自らを「フィジー人」とであると認識しているのにもかかわらず、制度によってそれが認められてこなかったという人々の葛藤が垣間見られる。「フィジー人」という呼称は、フィジーに愛着を持っているインド人のアイデンティティを肯定するものなのである。

一方で、反対派の以下のような意見もある。フィジー人男性教師 F（31 歳）は次のように述べた。

私はフィジー人であり、それを誇りに思っている。仮にインドに移住しても、絶対にインド人と呼ばれたくはない。インド人もインド人と呼ばれることに誇りを持つべきである。人種差別をしようというのではまったくない。どの人もそれぞれ違う文化を持っているのだから、そのことを尊重すべきである。

インド人女子学生 G（18 歳）も同様の意見を述べた。

インド人と呼ばれたい。そう呼ばれることでインドとのつながりを感じるからである。インド文化こそその文化であり、私のアイデンティティはインドとのつながりなしでは語れない。

多文化主義を目指して共通の呼称を使用することが人民憲章で提案されている。しかし、それが逆に多文化主義に反していて各民族のアイデンティティを傷つけると危惧する意見もあった。

2. NGO の試み

国民的アイデンティティの形成と国民統合にむけて、民間組織でも取り組みが行われている。以下に2つの NGO の取り組みを紹介する。

Ecumenical Centre for Research, Education and Advocacy (ECREA)は、1990年にボウラ・ニクイラによって設立され、フィジーにおける社会的、宗教的、経済的、政治的問題に取り組むことを目的とした NGO である。4つある主要プログラムのうちのひとつが YPDP (Youth Peace and Development Programme) で、これはフィジーの人口の約60%を占める25歳以下の若者を対象に、フィジー社会における差別を起因とした分裂や緊張に立ち向かう若者を育成するためのプログラムである。人種、ジェンダー、宗教、など社会の多様性を理解し、差別に反対できる若者の育成を目指す。

2009年には1月にフィジー全国の若者が話し合うユースフォーラムや、8月に国際青年デー (International Youth Day) のワークショップを開催した。筆者が参加した8月のイベントでは、「平和構築と多文化社会における若者の役割」についてワークショップが行われた。参加者は約40名で、フィジー人、インド人、中国人、パートユーロピアンなどさまざまな文化を背景とする参加者が集まった。参加者は教会や地域のユースグループの代表である人が多かったが、どの組織にも属していない人もいた。ワークショップでは、すべての参加者に発言する機会が与えられ、グループワークやゲームが行われた。人種差別やステレオタイプについての議論がなされフィジー社会の現状を把握した後、若者の誰もがリーダーとなって平和構築や多文化社会を推進していけること、若者が社会に果たすことができる役割についての講義を受けた。

ワークショップで強調されたことは「誰でも」平和構築を担うリーダーになれることであった。フィジーにおいて年長者の意見に従うように育てられ若者は、自分たち若者が社会でどのような役割を果たせるかほとんど認識しておらず、権利意識が希薄である。ECREA は、このようなプログラム中でも聞き手にまわり、発言することを躊躇することが多い若者の権利意識を啓発し、各地で同様のプログラムを行えるリーダーとなれるように促している。

また、The Citizens' Constitutional Forum Limited (CCF) は、1987年のクーデターにより分裂したフィジー人とインド人の架け橋となることを目的に1993年に設立された。憲法、民主主義、人権、多文化主義の擁護活動を各地で行っている。また、1990年憲法改正委員会の主要なメンバーで、1997年憲法の枠組み作りに重要な役割を担ってい

た。現在は国民統合と国民和解に向けた政治や憲法の問題に取り組んでいる。

2009 年からは ECREA の協力を得ながら若者を対象にしたプログラムの開発に取り組んでいる。若者向けのプログラムは、グッド・ガバナンス、人権、シティズンシップ、多文化主義の 4 つをテーマにしている。同年 10 月には最初のプログラムである「シティズンシップ・ワークショップ」が行われた。その目的は「若者に対するシティズンシップの重要性の啓発と擁護」、「シティズンシップの定義付け」、「シティズンシップをめぐって発生するさまざまな側面を追究すること」であった。若者向けプログラム担当者によると、シティズンシップはフィジーの人々にとってまったく親しみのない概念であるため、まずその概念を知ってもらう啓発活動を今後行っていく予定であるとのことであった。

政治ではよく「民主主義」や「多文化主義」、「権利」が話題になるが、フィジーの人々のあいだでは、それらの言葉が何を意味するか具体的なイメージがわく人が少ない。ECREA や CCF の取り組みによって、より多くの人が政府の方針、憲法や人民憲章で保障されている権利などを理解することが期待されている。

第5章 結論

本稿は、フィジーにおけるフィジー人とインド人の民族間関係に着目し、両者が共有する国民的アイデンティティが何によって表象されるのか、また、どのようにそれが形成されるのかを明らかにしようとしたものである。

フィジー人とインド人の民族対立は、英国植民地時代の分割統治政策によって相互に交流する機会を断たれたことに起因する。先住民優遇政策によって土地所有や政治における「至上権」を得たフィジー人は、後に「平等」を求めて政治運動を起こしたインド人と対立するようになった。さらに、インド人の人口がフィジー人を上回るとフィジー人はインド人に土地を奪われるという「不安」を抱き始め敵対感情をより深めていった。

独立後のフィジーは、いかに対立する両民族を国民統合するかということを国家課題としてさまざまな国民統合政策を行ってきた。しかし、多文化主義を目指して少しでもインド人の権利を認めると、フィジー人は「フィジー人の至上権」が脅かされる「不安」を高めてクーデターを起こした。

1987年のクーデター後は、「フィジー人の至上権」を確保するために民族主義的な1990年憲法が制定された。これは1997年に改正されて再び民主主義的な憲法となったが、2000年に初のインド人首相が誕生すると再びクーデターが起こった。フィジー政治において、いかに「フィジー人の至上権」を確保しながら、「インド人の平等」を保障して国際的に認められる民主主義を達成するかということは、現在も解決されていない最大の問題である。

フィジーで民族対立が解決されてこなかった最大の原因は、植民地時代からフィジー人、インド人という「人種」区分が制度化されてきたことによる。文化面で相容れない側面を持つ両者が憲法の規定により政治面でも分断されてきたことで、それぞれが別々に「民族アイデンティティ」を強化し、敵対感情を深めて、国民として共通のアイデンティティ形成を妨げてきた。

一方で民族アイデンティティの強化が進み、他方では多文化主義を目指した国民的アイデンティティの形成が進められる。フィジー社会にはその他にも多くの矛盾が存在していた。ラトゥヴァは、フィジーが「シンクレティック社会」の典型であると指

摘し、フィジーでは一方で矛盾している要素が、他方では同時に融合と調整を繰り返していると主張した。

都市はフィジーが内包する矛盾が最も表出する場所である。また、その都市で生まれ育った若者は、矛盾した社会でさまざまなジレンマにぶつかり、アイデンティティを見失っている。しかし、この状況から国民的アイデンティティ形成に向けて肯定的な面をみいだすことができる。若者は、それぞれの民族が今まで頑なに固持してきた民族アイデンティティから脱却しようとしている。そして、若者は自民族のアイデンティティを保持したうえで、多文化社会が生み出す新しい文化に順応し、他の民族と共有するその新たな文化を取り込んだ新しい国民的アイデンティティを形成しようともがいている。

2009年12月に発表された「人民憲章」は、国民統合と国民的アイデンティティの形成を達成するための具体策を提示している。違法に設立された軍事政権によって制定されたとして、その存在自体に反対する意見もあるが、国民統合にむけた具体策を提示したことは評価に値する。しかし、問題はその内容が進歩的すぎる点にある。理想を大きく掲げても土台がしっかりしてなければ、砂の上に立派な城を建てるようなものである。人民憲章で掲げられた事項を実現するには、まず国民の理解と支持が必要なければならない。

そのために、現場レベルでも国民的アイデンティティ形成に向けた取り組みが行われている。NGOが若者向けのプログラムを実施して、多文化主義や国民的アイデンティティ形成を推進している。

今後のフィジーにおいて持続可能な国民的アイデンティティを形成するには、ボトム・アップのアイデンティティ形成をする必要がある。今までのように国家が決定した国民統合政策のもと、「人種」が制度化したうえでの多文化主義が押し付けられるようなトップダウンの国民統合では持続可能な国民的アイデンティティは形成されない。そうではなく、国民自らが国民統合の必要性を認識し、それに向けて取り組んでいく必要がある。そのうえでアイデンティティを見失ったり、ジレンマに陥る可能性はあるが、国民同士の対話を通して自ら道を切り開くことが期待される。

タンドラ・カハニ（Tadra Kahani）は、小学校とセカンダリースクールの生徒が学校ごとに参加し、環境問題、人権問題、貧困問題など、フィジーの社会問題をテーマに取り上げて歌と踊りと演技で表現するミュージカル風のイベントである。年に1度フ

ィジー最大のインドア施設であるヴォーダフォン・アリーナで行われるが、毎年満員になりテレビ放映もされるなど国民の注目度は高い。

テーマはさまざまであるが、それぞれフィジー国民が共通に抱える社会問題に民族の枠を超え、ひとつの国民として子どもたちが協力して取り組む姿は、フィジーのあるべき将来像と重なるのではないだろうか。タンドラはフィジー語で「夢」、カハニはヒンディー語で「物語」という意味である。演技者の衣装や化粧、舞台の道具は、フィジー、インド、その他の文化の特徴を融合して作られている。2009年の優勝校のテーマはまさに「フィジーにおける文化の変遷と統合」であった。フィジーに存在する多様な文化が変化し、融合され、すべての国民がそれを共有する。タンドラ・カハニが示す文化の融合は「フィジアンネス」の可能性を大いに感じさせる。

注

- (1) フィジーにおいて「ヨーロッパ人 (Europeans)」とは、一般に白人を指す。ヨーロッパ以外の出身（例えばアメリカ、オーストラリア）であっても「ヨーロッパ人」と称される。
- (2) Maps of the World のウェブサイト (<http://www.azerb.com/maps.html>) より (2010/1/17 参照)。
- (3) フィジーへの最初の移民については、その時期や出身地に関して諸説あるが、紀元前約 1200～1500 年前に移住してきたという説が有力である。詳しくは、南太平洋大学パトリック・ナン教授 (Patrin Nunn) の著書 (e.g. Kumar, R., Nunn, P.D. and Dickinson, W.R. 2004. The emerging pattern of earliest human settlement in Fiji: four new Lapita sites on Viti Levu Island. *Archaeology in New Zealand*, 47, 108-117.) を参照のこと。
- (4) 「ネイティブランド」は、フィジー人の伝統的共同体組織である「マタンガリ (Mataqali)」によって所有される。「フリーホールドランド」は、植民地以前に入植した主にヨーロッパ人によって購入された土地であり、植民地政府によってその合法性が認められた。「クラウンランド」は、1875 年の時点でどの共同体にも属さなかったり、あるいは英国王室によって購入された土地である[高橋 2008:4]。
- (5) 土地制度に関して詳しくは[高橋 2008:4]を参照されたい。
- (6) ラトゥ・スクナの伝記作家であるデリック・スカー (Deryck Scarr) によると、スクナの書き残した日記にこの比喩を使用した記録はない。しかし、1960 年代にスカーが接触を持ったフィジー人の間ではこの比喩はスクナが用いた概念であると広く考えられていたため、スカーはスクナの日記を編集出版する際、"Fiji : the Three-Legged Stool : Selected Writings of Ratu Sir Lala Sukuna"と題した。「三脚の腰掛け」という比喩の使用に関する論文も、一般にスカーが編集したこの本を引用している [Trnka 2005: 365]。
- (7) 「タウケイ・ブランギ」概念に関しては第 3 章で詳説する。
- (8) 上院は、大首長会議任命 8 名、首相任命 7 名、野党党首任命 6 名、ロトゥマ会議 (フィジー領内ロトゥマ島住民の自治組織) 任命 1 名によって構成されていた[小

柏 1992:210]。大首長会議任命の議員がフィジー人の利益を反映する傾向が強いため、下院の議席数がインド人と同数でも、フィジー人は優位性を確保することができた。

(9) 15名の閣僚のうち、フィジー人7、インド人7、その他1という構成であった。同盟党政権下では、16名の閣僚中、フィジー人12、インド人2、その他3という構成であったため、インド人の比重を増しているという印象が強かった [小柏 1992:201]。

(10) フィジー人政党はフィジー人の35%の票を得て7議席、国民連邦党はインド人の27%の票を得ながら議席の獲得はなかった。新選挙制度によって得票数と議席獲得数の非整合性が発生し、選挙制度の欠陥を指摘する意見もある。選挙制度について詳しくは[東 2000]を参照されたい。

(11) フィジーでは「人種 (race)」という用語が生物学的要素だけでなく言語や慣習、宗教などの文化的な要素とも結びつく概念として「民族 (ethnicity)」と同じ意味で一般的に使われる[Emde 2005:387-388]。本稿では原則的として「民族」という語を使用するが、フィジーで使用されるという文脈で言及する場合のみ、「人種」という語も用いる。

(12) この論は、Rtuva, S. 1999. *Ethnic Politics, Communalism and Affirmative Action in Fiji: A Comparative and Critical Study*. Unpublished PhD thesis, University of Sussex. で最初に紹介されたが、筆者は未読である。

(13) [Norton 2000:107]より引用した。もとの出典は不明である。

(14) フィジータイムス (Fiji Times) のウェブサイト <http://www.fijitimes.com/story.aspx?id=124623> (2010/01/17 参照) より。

(15) 人民憲章は、国民会議 (NCBBF) 運営の人民憲章のウェブサイト <http://www.fijipeoplechart er.com.fj/> よりダウンロード可能である。

(16) SNE 報告書は、国民会議 (NCBBF) 運営の人民憲章のウェブサイト <http://www.fijipeoplechart er.com.fj/> よりダウンロード可能である。

(17) フィジータイムス (Fiji Times) のウェブサイト <http://www.fijitimes.com/story.aspx?id=86434> (2010/01/17 参照) より。

(18) ラジオニュージーランド・インターナショナル (Radio New Zealand International) のウェブサイト <http://www.rnzi.com/pages/news.php?op=read&id=41366> (2010/01/17

参照)より。

参考文献

Citizens' Constitutional Forum (CCF)

- 2001 *Ethnicity, National Identity, and Church Unity: A Study on Fiji 2001*. Suva, Fiji: Citizens' Constitutional Forum (CCF).

Derrick, R.A

- 1946 *A History of Fiji*. Suva, Fiji: The Colony of Fiji at the Government Press.

Donnelly, T.A (eds.)

- 1994 *Fiji in the Pacific*(4th edition). Qld, Australia: John Wiley & Sons Australia.

Durutalo, S

- 1986 The Paramountcy of Fijian Interest and the Politicisation of Ethnicity. *South Pacific Forum Working Paper* 6: 1-52.

Emde, S

- 2005 Feared Rumours and Rumours of Fear: The Politicisation of Ethnicity During the Fiji Coup in May 2000. *Oceania* 75(4): 387-402.

エリクセン, T. H

- 2006 『エスニシティとナショナリズム—人類学的視点から』鈴木清史訳、明石書店。(Thomas Eriksen, 1993, *Ethnicity and Nationalism*. London: Pluto Press)

Fiji Islands Bureau of Statistics

- 2009 Population of Fiji by Ethnicity. *Key Statistics: June 2009* <http://www.statsfiji.gov.fj/Key%20Stats/Population/2.2%20pop%20by%20ethnicity.pdf> (2009/1/5 参照)。

Fraenkel, J and Firth, S

- 2009 Fiji's Coup Syndrome. In Fraenkel, J, Firth, S, and Lal, B (eds.), *The 2006 military takeover in Fiji: a coup to end all coups?*, pp.449-458, Canberra: ANU E Press.

Gaunder, P

- 2007 *An Elusive Dream: Multiracial Harmony in Fiji 1970 – 2000*. A thesis submitted to the University of Waikato.

Geraghty, P

- 1997 The Ethnic Basis of Society in Fiji. In B. Lal and T. Vakatora (eds.), *Fiji in*

Transition. Volume 1, pp.1-23, Suva: The School of Social and Economic Development, The University of the South Pacific.

橋本和也

- 1993 「多民族国家フィジーの都市生活者」清水昭俊・吉岡政徳編『オセアニア ③ 近代に生きる』pp69-83、東京大学出版会。
- 2000 「フィジー諸島共和国憲法と国家統合への道」須藤健一編『JCAS 連携研究成果報告 2—オセアニアの国家統合と国民文化』pp.61-82、国立民族学博物館・地域研究企画交流センター。
- 2005 『ディアスポラと先住民—民主主義・多文化主義とナショナリズム』、世界思想社。

東裕

- 1999a 「フィジー諸島共和国憲法(1997年)における人権と原住民の権利」『苫小牧駒澤大学紀要』2 <http://www.jaipas.or.jp/> (2010/1/17 参照)。
- 1999b 「国民国家形成と憲法—フィジー諸島共和国の場合」憲法政治学研究会編『近代憲法への問いかけ—憲法学の周縁世界』<http://www.jaipas.or.jp/> (2010/1/17 参照)。
- 2000 「フィジー・クーデタ、その後—2001年新憲法の制定へ—」『パシフィッククウェイ』116 <http://www.jaipas.or.jp/> (2010/1/17 参照)。
- 2003 「フィジー政治の論理—国民統合政府の理念と現実」山本真鳥・須藤健一・吉田集而編『JCAS 連携研究成果報告 6—オセアニアの国家統合と地域主義』pp.139-160、国立民族学博物館・地域研究企画交流センター。
- 2008 『フィジー「人民憲章」(PCCPP)と民主制復帰について』『パシフィッククウェイ』132 <http://www.jaipas.or.jp/> (2010/1/17 参照)。

春日直樹

- 1990 「エスニシティと階級—フィジーの事例から—」『奈良大学紀要』19:161-175。

Lal, Brij V

- 1992 *Broken Waves: A History of the Fiji Islands in the Twentieth Century*. Honolulu: University of Hawaii Press.
- 2000 *The Voice of the People: Ethnic Identity and Nation Building in Fiji. The New Pacific Review, Pacific Identities Noumea Symposium Proceedings 15-16 July*

1999 1 (1):127-144.

Lawson, S

- 2004 Nationalism Versus Constitutionalism in Fiji. *Nations and Nationalism* 10(4):519-538.

Naidu, A

- 2005 *Let's All Celebrate*. Suva, Fiji: Ecumenical Centre for Research, Education, and Advocacy (ECCREA) and Citizens' Constitutional Forum (CCF).

National Council for Building a Better Fiji

- 2008a *The State of the Nation and the Economy Report*. Suva, Fiji: National Council for Building a Better Fiji.
- 2008b *Peoples' Charter for Change, Peace & Progress*. <http://www.fiji-peoples-charter.com.fj/> (2010/1/17 参照)。

Nayacakalou, R.R

- 1975 *Leadership in Fiji*. Melbourne: Oxford University Press

丹羽典生

- 2005 「フィジアン—フィジー人とインド人の共存」綾部恒雄監修、前川啓治・棚橋訓編『講座 世界の先住民族—ファースト・ピープルの現在 第9巻』pp.269—282、明石書店。
- 2007 「フィジー諸島共和国における政治的混乱の分析に向けて—2006年12月5日のクーデタの発生前夜から臨時政権の確立まで」『パシフィックウェイ』130 <http://www.jaipas.or.jp/> (2010/1/4 参照)。
- 2009 『脱伝統としての開発—フィジー・ラミ運動の歴史人類学』明石書店。

Norton, R

- 1977 *Race and Politics in Fiji*. New York: St. Martin's Press.

小柏葉子

- 1992 「島嶼国フィジーにおける『国民統合』—『先住民』・『移民』と階層分化」百瀬宏・小倉充夫編『現代国家と移民労働者』pp.193-211、有信堂高文社。

Premdas, R.R

- 1991 Fiji Under a New Political Order: Ethnicity and Indigenous Rights. *Asian Survey* 31(6): 540-558

Rakuita, T

- 2007 *Living by Bread Alone: Contemporary Challenges Associated with Identity and Belongingness in Fiji*. Suva, Fiji: Ecumenical Centre for Research, Education, and Advocacy.

Ratuva, S

- 1999 *Ethnic Politics, Communalism and Affirmative Act in Fiji: A Critical and Comparative Study*. Unpublished PhD thesis, Institute of Development Studies, University of Sussex.
- 2002a *Participation for Peace: A Study of Inter-Ethnic and inter-Religious Perception in Fiji*. Suva, Fiji: Ecumenical Centre for Research, Education, and Advocacy (ECREA).
- 2002b *The Paradox of Multi-culturalism: Managing differences in Fiji's syncretic state*. Paper presented to international conference on Pluricultural States and Rights to Differences, University of New Caledonia, 3-5 July 2002.
- 2005 Politics of Ethno-National Identity in a Post-colonial Communal Democracy: The case of Fiji. In A.L.Allahar (ed.), *Ethnicity, Class and Nationalism. Caribbean and Extra-Caribbean Dimensions*, pp.171-198.Lanham: Lexington Books.

Ravuvu, A

- 1983 *Vaka I Taukei: The Fijian Way of Life*. Fiji: Institute of Pacific Studies of the University of the South Pacific.

Scarr, D (ed.)

- 1983 *Fiji : the Three-Legged Stool : Selected Writings of Ratu Sir Lala Sukuna*. London: Macmillan Education.

高橋玲

- 2008 「フィジー社会における人種間格差の政治経済史—土地所有制度をめぐるインド系住民とフィジー系住民の対立」『CREI ディスカッションペーパー』12.

Trnka, S

- 2005 Land, Life and Labour: Indo-Fijian Claims to Citizenship in a Changing Fiji. *Oceania* 75(4): 354-367.

Vakaati, P & Khan, N

2008 Culture, *Conflict: Implications for young people in Fiji*. Suva, Ecumenical Centre for Research, Education, and Advocacy (ECREA).

英文サマリー

Building National Identity in Fiji

Fiji since its independence in the year 1970, has been struggling to keep its Government running smoothly as the country has been going through political instability due to ethnic conflicts. Fiji hurdles a total of 4 series coups and 3 constitutions. Fiji consists of the 2 major ethnic groups, Indigenous Fijians (Fijian) and Indo-Fijians (Indian). These 2 ethnic groups in Fiji are itself so different by culture, by language and religion. And it has been a long hard struggle to achieve national unity of the two groups. The heart of the problem in Fiji lies in the lack of national identity.

This paper will talk about the previous attempts to build or create national unity and national identity as a whole, plus its failure to do so. It will also talk about one of the biggest challenge in Fiji which is trying to nurture national identity to national unity. Finally, the author addresses the issue of ethnic conflict, national unity and national identity in Fiji, and reveals the way to achieve national unity in Fiji.

In chapter 2 of this paper, will show an overview of Fiji's multi-ethnic society and the historical evolution of the political process which also recognizes the Nation struggling with the ethnic conflicts. Deep-rooted Ethnic conflicts are due to the times and days of the British colonial policy, 'Divide and Rule'. British gave Fijian paramountcy and Indian (Indians brought to Fijians indentured labor) became second class citizens. Since then, ethnic identity conflicts in Fiji burst out of control. The Fijians claim the paramountcy of Fijian interest while the Indians claim parity. Then 1970, Fiji became independence. Since then, overcoming the issue of how to achieve both and create national unity became the main objective of the state of Fiji.

In chapter 3, the author examines the how and when this ethnic identity of Fijians and Indians became strengthened and caused conflicts. It will tell of the Ethnic division and when it has been institutionalized in the history of Fiji, which then caused deep rooted ethnic

conflicts in the country. Then, the author will reveal the paradoxes existing in Fiji. Promoting national unity and multiculturalism and at the same time promote distinctive ethnic identity. Paradoxically, seemingly contradictory forces, however, may be in contention, and at the same time, they may accommodate each other at another level. Paradoxes can be seen clearly in a city (urban area) where multi-culture, ethnic meets.

This chapter also examines young people in city who are struggling with conflicts. They are more flexible than adults and easily adapt to a new culture. They are, however, facing conflicts of old and new, tradition and modern, ethnic identity and multi-ethnic identity and such. Young people in city are confused and going through identity crisis which shows desperate signs of need of a framework or leadership to find out how unity and national identity are being carried out while protecting ethnic culture and identity.

Chapter 4 takes a look at some of the attempts by the state to address ethnic tensions and to build national unity and national identity from within. The author also talks about the term People's Charter which was released in December, 2008. The main theme was labeled "One nation, One people". One nation, one people seeks for national unity and national identity. Grassroots level attempts were also found out to be seen and heard by the people. This point directly to NGO programs which concentrates on multiculturalism and national unity, and etc.

In conclusion, The author suggest the method of Bottom-up identity building, which may hold the key to unlock this long standing conflict in Fiji. From grass root level, young people with the framework of the state (People's Charter).

謝辞

本論文は、筆者が数え切れないほどの多くの人々の協力を得て書き上げたものである。筆者に影響を与えてくれた人、論文執筆を応援してくださった人、すべての人たちにこの場を借りて感謝の意を示したい。

フィジー留学中には多くの人々のお世話になった。USPの友人をはじめ、学外でも多くの人にお世話になった。マーティンさん、ジョーダンさん、テディーさん、アイザックさん、シヴァさんには生活面で大変お世話になった。エペリさんにはフィジー語や文化について多くの知識を教えていただいた。フィジー留学中に経験したことは論文執筆に大きく役立っただけでなく、人生の宝となった。留学中に会ったすべての人々に感謝したい。

2009年のフィジーでの現地調査では、ペニさん、スタンリーさんに大変お世話になった。調査のためにたくさんの方々を紹介していただき、出身の村落や教会などさまざまな場所に連れていってもらった。スタンリーさんには食事や宿も提供していただき、ご家族やご友人にもお世話になった。滞在期間の前半はニコールさんにも宿と食事を提供していただいた。他にも多くの友人が調査に協力してくれた。オーストラリアを経由した際は、チャンティンさんにもお世話になった。ここに御礼を申し上げる。

ゼミのみなさん、学類の同期生には論文執筆を応援していただいた。大変感謝している。インターンシップでお世話になったラトゥ・クブアンボラ閣下、ケレラさんをはじめ駐日フィジー大使館の方々や日本在住のフィジーの方々にも御礼を申し上げたい。

指導教官である関根久雄先生には留学中も含めて3年間大変お世話になった。フィジー留学を決意したのも快く了承してくださり、留学準備の手助けまでしていただいた。ご迷惑をかけてばかりだったが、論文執筆中を含めて常に寛大に見守ってくださった。先生のもとで勉強できたことは大変光栄であった。心から厚く感謝を申し上げたい。

また、最後に両親に感謝の意を表したい。今までの学生生活を温かく見守ってくれたこと、前例のないフィジー留学を認めてくれたこと、やりたいことは何でもやらせてくれたことに大変感謝している。経済的な援助もそうであるが、何より精神面で大きな支えとなってくださった。最高の両親である。本当に心から感謝している。